
天心天命

燈亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天心天命

【Nコード】

N6970K

【作者名】

燈亜

【あらすじ】

しっかり閉じた目をそつと開いてみれば見覚えのない場所。

……そうか。つまりこれは友人の『お引越し』に巻き込まれた訳か。そうに違いない。オーケー、理解した。

とりあえず辺りを見てみれば、なぜか石のように動かない男が一人とりあえず近付く。とりあえず凝視。

と、その男は目を開けた。

「……お前が神の子か」

何だ、生きた化石じゃないのか。そう思ったがとりあえず答えた。

「……いえ、人の子です」
そんなこんなで始まった異世界トリップもの。きっと恋愛ファンタ
ジー。

「私、明日引越すの」

突然だった。

もちろん、驚いた。今まで一度もそんな話聞いてなかったから。それでも、元来の無口というか口下手な性格のせいか、衝撃の告白を聞いた後の秋の第一声は簡単だった。

「……そうか」

第二声も簡単だった。

「でも、私、お金持っていない」

何も知らない人が聞いたらどうして引越しの話からお金の話になるのかと疑問に思うだろうが、秋との付き合いが長い衝撃の告白をした本人は、その言葉を聞いて吹き出した。そして秋が衝撃を受けても変わらないことにほっとしたらしく、静かに微笑んだ。

「大丈夫だよ秋。貯蓄家の秋からお高い饞別を貰おうなんて思っていないから」

でも、と彼女は続けた。

「一応、もう会えるかどうか分からないからお願いがあるの」

そんなに遠い所、例えば外国とかへ引越してしまうのかと秋は不

思議に思ったが、親友とも呼べる彼女、優梨の願いなら喜んで聞くつもりだった。

「なんなりと」

秋の言葉に、優梨はどこか寂しそうに笑った。

「秋のね、ジンジャークッキーが食べたい」

「誕生日に作ったやつ？」

「うん。あれ、すごく好きだから」

「……あんなのでいいのか？」

強く頷いた優梨に、秋は複雑な気持ちで分かったと言葉を返した。

優梨に初めて会ったのは中学二年の時だった。

偶然クラスが同じで偶然話をし、偶然気が合って仲良くなった。

それから現在の高校二年まで、何だかんだと特に仲違いすることもなく続いてきた関係だ。

確かに、今時の女子高校生の友人関係のように誰が誰を好きだとかいう恋バナみたいな話をした覚えもないし、おそろいのキーホルダーのような物を買ったこともない。けれど優梨はクラスメイトとしての気遣いだとかそんなものは飛び越えて、暇さえあれば秋の所へやってきたし、日常生活で起こったこと、感じたことを事細かに話してきた。それが例えどんなに小さいことであろうと。

そういう関係を友情と言うのだろうと、漠然とそう思っていたのだが。

おかしい、と秋は確かに思った。

思い返してみれば、こここの所ずっと優梨はおかしかったのだ。無駄に寂しそうな目で秋を見る。そのうちその理由を言うだろうと待っていたが、まさか引越すとは。それも話から察するにそうとう遠い所へ。

けれど、やれ卵が爆発した、やれ電信棒にぶつかったと意味の分からないことばかりを話してきた優梨が、なぜ引越すなどと言う事実を言わなかったのだろう。

迷惑だと思った？いや、優梨の性格からしてそれはない。

ただ単に言い出しにくかったから？それもないような気がする。

ぎりぎりまで言えなかったから？

そう考えて、秋は誰もいない帰り道で首を振った。

誰にも言えない引越してどんな引越した。国外亡命でもあるまいし。ありえないありえない。

もう一度首を振った。

でも、それでもぬぐえない確かな不安とかすかな予感がそこにはあった。

？序章01

お引越し（後書き）

部室の中で一人、ジャージに着替えていた秋は、ふとその手を止めた。他の部員たちはもう練習を始めているからいない。グラウンドから聞こえてくる野球部やらサッカー部やらの喧騒が戸を一枚隔てた向こうから聞こえてくるせいか、一人で部室にいる自分がどこか別空間にいるような気がした。別空間の静けさ。その静けさの中で、秋は先程まで手元にあった菓子の袋が無いことに寂しさを感じた。その袋は今、優梨の手の中にある。

菓子の袋を手に、嬉しそうに笑っていた優梨の顔が浮かんだ。呆気ない程簡単に終わった、別れの言葉も。

結局優梨の引越について分らないことが多かった。どこへ引越すのかもまた会えるのかどうかもはつきりしなかった。優梨が言わないから秋も聞かなかったのだ。今になって、聞くべきだったのだろうかと思う。……分らない。

また、優梨の顔が浮かんだ。二度と会えないだなんて信じてはいないはずだったが、もしそうだったらと思うと体の中が冷たくなる。同時に、焦燥感に駆られた。

自分はさっき優梨に何を言っただろう。遠くへ引越すという優梨に何を。

考えて、胸の中が重くなった。秋は彼女に、ありがとうの一つも言っていなかった。一番伝えたかった言葉を言っていなかったのだ。中学の時から一緒にいた、一緒にいてくれた優梨に。

しまったと思った。けれど、走り出そうとする自分を自分が止める。もう遅いかもしれない。別れの言葉を言ってから随分時間が経っている。きつと優梨は帰ってしまった。いやでも。

ああ、くそ。

心の中で舌打ちをした秋は部室のドアを開けた。いつもそうだ。自分が言いたいことに気付くのはいつも遅い。でも今回は。

自分で自分に、走れと叫んだ。

まだ教室にいるかもしれないと、部活のジャージ姿のまま秋は走った。上履きに履き替えるのが面倒だから運動靴を脱ぎ棄て、靴下のままで廊下を駆ける。さすがにまだ教室のいることはないだろうと落ち着いた自分が言っていたが、それでも二階の、さっきまで優梨と一緒にいた教室に向かっていた。

焦る気持ちを抱えて階段を二段飛ばしで一つ上がり、二つ上がる。教室へ続く、誰もいない廊下に立った時、そこで初めて秋は違和感を覚えた。急ぐ心とは裏腹に、自動的に足が止まる。秋と優梨のクラスは手前から三つ目だ。何だろう、と秋は自分のクラスに目を凝らした。見間違い、ではない。確かに今、教室内で青い光が一瞬光った。

青い光。それも強烈な。

と、再び同じ光が教室内から廊下に溢れた。廊下の窓を、天井を青く染めたその光はけれど、一瞬で消える。やはり見間違いではない。数拍置いてまた光り、そして消えた。見間違いようが無い。

「何だあれ」

間違いなく、その光は点滅していた。

秋が思ったのは、優梨のことだった。もしかして、あの中に優梨がいるかもしれない。いやでも何で。あの青い光と優梨に何の関係がある？

固まった足を無理に動かして、秋は教室に近付いた。

至って普通の高校の教室にUFOでも着陸したのだろうか。いやいやいや、それもありえない。

走ってきたせいではなく少し速くなった鼓動をなだめて、秋は自分の教室のドアに手をかけ、一気に開いた。

瞬間、中から溢れだした光に目が眩む。とてつもなく眩しい。まぶたの裏までもさすその光をもどかしく思いながら、秋はそつと目を開いた。

教室の中央に立っていたのは、先程別れた優梨だった。

規則正しく並んでいたはずの机と椅子は全て壁に寄せられ、教室の中央には広い空間ができています。青い光は、そこから発せられていた。

中央に立つ優梨を囲むように引かれた光の円。何重ものその円が、一同に光りを発し、消える。そこから風が吹いているのか、窓は全部閉じられているのに優梨の膝上のプリーツスカートも彼女の茶色がかつた髪も宙で激しく揺れていた。

幻想的とも言える光景。ただ一つ、優梨の表情を除いては。

一瞬目が釘付けになった秋はけれど、優梨を見て我に返った。

優梨は秋を見ていた。その顔に浮かぶのは、驚愕と迷いと困惑と、……あとはなんだろう。

全てをごちゃまぜにした優梨の表情に、秋は立ち尽くした。どうすればいいのか見当もつかない。お礼を言うつもりで来たが、それを言える状況ではないことは明らかだった。

光に包まれながら秋と同様に立ち尽くしていた優梨の口から洩れた言葉は、彼女のいつものきはきはした声ではなかった。かすれて震えて、蚊の鳴くような小さな声。

「何で、秋が……今まで全然……じゃあ何で……？」

「優梨に、ありがとうって言ってなかったと思って……」

会話が噛み合っていない。優梨の求めている答えではないと思ったが、秋の口は勝手に動いていた。けれどその言葉で、優梨の表情が変化した。一瞬目を見開いたが、俯いて、唇を噛む。苦しそうな、顔。

「私は、今まであんなに殺して……でも秋が……嫌だ……」

その悲しそうな声に、思わず秋は彼女の名前を呼んで近付こうとした。

「ゆづ……」

最後まで言えなかった。

自分の足元で輝いた青い光。

「え」

困惑の言葉がこぼれる。見下ろせば、青い円が秋を囲んでいた。足の下には、見たことのない象形文字が円に沿って書かれている。点滅する光。優梨のそれよりも速い速度で光り、消える。

「何だ、これ……」

その時、前方から何か、空気の流れのようなものを感じて、秋は顔を上げた。

光に慣れた秋の目には優梨が今にも泣き出しそうな顔でこちらを見ているのが映った。左手でしっかりと押さえられた右手の、白い手のひらを秋にまっすぐに向けて。

最高潮に達した秋の困惑を余所に、詠唱が始まる。

「い、イル・セ・キリーヴェ天の光が穿つ沙汰、ヴァレ・デリイア・フェリナス絆しの現萬の言の葉……」

「……優梨？」

優梨の震えた声で紡がれる訳の分からない呪文のような言葉。逃げべきなのか留まるべきなのか。秋は考えたが、考えることを放棄した。どうすればいいか分からない。そもそもこの状況がまず分か

らないのだ。唇を噛む秋を知ってか知らずか、優梨の言葉は続く。

「ロタ・ケルワイ・シヴァーダ空の同胞矢に結べ、レ・セウイリア・ボトス片方の弓よ、掻き暗せつ！！」

瞬間、優梨の手のひらからすさまじい速さで何かが放出された。必然的に危機感を覚え、避けることはできないと悟った秋は、直感的に腕を大きく横一文字に、払いのけるように振った。けれどその必要はなかった。秋の方に向けられていたはずのそれは、なぜか秋の足元を直撃していた。階下の教室がうつすらと見えるほどまで穿たれた教室の床。

背筋がぞつとして、思わず唾を飲み込んで顔を上げた秋は、先程と変わらない姿で立つ優梨を見た。けれどその、秋へ向かって突き出された腕は激しく震えている。そのせいで秋へは当たらなかつたらしい。

「優梨？」

直撃していれば即死の攻撃を友人から受けたはずなのに、秋の声は心の中はどうあれ落ち着いていた。その声に、今にも泣き出しそうな顔をしていた優梨は、いまだ明滅する光の向こうで俯いて肩を大きく震わせた。堰が切れたように言葉が飛び出す。

「何で、何で秋なの？今までずっとずっと一緒にいたのに全然つ…
…私、あんなにたくさん殺したのに、何でよりによって秋がつ…」

けれどその後続く言葉は光によって妨害された。秋の下の青い円が、青い象形文字が、一際強く、明るく輝いた。これは逃げなければと足を動かそうとするが、光が秋の体を固定しているのか、体が全く動かなかつた。嫌な汗が背中を滑り落ちる。自分はどうなるうとしていたのだろうか。

全身全霊の力で足を動かそうとしたが、やはり動かない。
顔を上げれば、涙を目の縁までたたえた優梨が秋の方を見ていた。

いやいやいや、なんなんだこの非日常は。

突如として消えた青い光と体の固定に、秋は思わずよろめいて地面に倒れた。とっさに受け身をとったものの、膝やら肘やらをしたかに打ってしまふ。呻いた秋は、その倒れた状態のままごろんと体を動かして仰向けになった。目に映ったのは、さっきまでと打って変わった暗闇。強烈な光に慣れていた目には今自分がいる場所がどこか、何があるのか全く見えない。

とりあえず、現状把握。

巻き込まれた感が拭えないながらも、秋は上半身を起こした。まずは腕に手を這わせる。痛い所はない。打った所も血が出ている様子は無い。足も同じく。体におかしい所はないようだ。

息を深く吸い込んで、吐く。呼吸器官にも問題はない。

続いて辺りを見回してみる。体の下にあるのはひんやりとした石のような床。風は吹いていないから部屋の中らしい。静かで物音一つしない。

立ち上がろうとした秋は、はたと気付いた。

この状況、もしかしたら夢かもしれない。

その可能性はさっき打った肘と膝がひりひりするから低いとは思わうが、もしかしたらという可能性だってないことはない。だってまず第一に、優梨の周りで光っていたあの円からして信じられない状況なのだ。それに呼応するように秋の周りにも円ができ、結果的になんだか真つ暗な部屋に来てしまったが、到底信じられる話ではない。

よし。

秋は目を閉じた。夢か夢でないかを判断しなければならぬような状況に今まで陥ったことはないから正直どうすればいいかわからなかったが、とりあえず目を閉じた。尻の下、手の下の冷たい石の感触が嫌にリアルだ。夢とは信じられないくらいに。

三分ほどしつかりと目を閉じてからそつと開いてみる。少し闇に慣れた目のおかげで、部屋が真つ暗ではなく薄暗いということが分かった。光も無いのに薄暗い。けれどもやっぱり見覚えのない場所だ。思わずため息をつく。頭の中で優梨の声が響いた。

『私、明日引つ越すの』

昨日突然言われた衝撃の言葉。秋は考えた。引つ越すというのはもしまよこれか。秋には今自分がどこにいるのか分からなかったが、元いた場所でないの是一目で分かる。それに、確かにこれは普通の引つ越しではない。瞬間、再びため息が出る。

……そうか。つまりこれは優梨の『お引つ越し』に巻き込まれた訳か。そうとしか考えられない。

オーケー、理解した。

どうやら優梨とは違う場所に来てしまったらしいが、まあどうしようもないから仕方ない。

それに、はずれたとはいえ殺されそうになったのだ。秋は忘れたかった事実を思い出した。

泣きそうな顔で。震えながら。

事情はほとんど言っていない程理解できなかったが、それでも優梨には秋を殺さなければいけない理由があったのだ。命を狙われる覚えなんて秋には無いが、優梨には狙う理由があったらしい。けれど優梨は秋を殺さなければいけない相手だとあの時まで知らなかった。だから実際殺そうとした時にあんなに震えていたのだろう。また会った時にはどうなるか分からないが、秋にとって優梨がそうであるように、きっと優梨にとって秋も友達だ。

そう考えて、秋は自分の髪の毛をわしゃわしゃと掻き回した。面倒事に巻き込まれた時、どうすればいいのか分からない時の秋の癖だ。

「いやいやいや、何でいきなり命に関わることになってんだ」

思わず一人で呟いて、これが最後と思い切りため息をつく。友人に殺されそうになるなんて考えたことも無かったけれど、なまってしまったものはしょうがない。

驚くほどあっさりと割り切って、現状把握を続けようと、薄暗い中で秋はそつと立ち上がって自分を見下ろした。着ている服は下部活用の短パン、上も同じく部活用のＴシャツとその上に長袖の青いジャージだ。靴は学校の玄関で脱ぎ捨てたままだから靴下だけ。持ってる物は無い。携帯はもちろん、財布も。なかなかきつい状況だ。身内である兄に連絡することもできないし、もしこの部屋から出れたとしてもヒッチハイクで帰るしかない。

沈んでいく気分を無視して、周囲を見回す。思ったよりも広い部屋だった。実際は部屋と言っていいのかどうか分からなかったが、牢屋だとかは思いたくないので部屋としておく。とりあえず秋が立っているのは部屋の端っこらしく、後ろには床と同じ材料で作られたと思われる壁があった。ドアらしきものは見えない。逆に前は教室三つ分くらいまで続いている。その前の方に、よくは見えないが何かがあるのは分かった。祭壇、のような長方形の物体。まずは近付いてみようと、秋は歩きだした。

思わず、沈黙した。

さつき見えた長方形の物体は、思った通り石でできた祭壇だった。近くで見ると、とても細かく丁寧に掘られた草の模様が美しい。大きさは、上にちょうど大の大人一人が寝転がれるくらいだろう。しかし上には何も乗っていないかった。

あくまで上には、だ。

「……誰だろ」

遠くから見た時は祭壇の影になって見えなかったのだが、今秋の目の前には男が一人いた。

左膝を立てその上に左腕を乗せた状態で、祭壇の側面にもたれて座っている男。目は閉じられており、微動だにしない。右手には剣が握られている。

秋は眉を寄せた。剣。……剣？いや、いつの時代だ。

とりあえず男に近付き、とりあえず凝視する。

剣はどこから見ても剣だった。詳しくは分からないが、多分ロングソードというやつだ。十字の形をした細身の剣。握る部分を男の手が握っているのでよく見えないけれど、どうやら黒くて艶のいい石、つまり宝石がはめ込まれている。刀身は鞘で覆われていたが、その鞘にも紐で黒くて艶のいい石、つまり宝石がぶら下げられていた。

何だこれ。何だこいつ。

男が目を閉じたまま動かないのをいいことに、秋は男をまじまじ

と見つめた。気付けば、男の服装も、一般的な現代人と比べると明らかにおかしい。

白いシャツに、大きな襟の付いた黒のロングコート、膝より少し上の短パンにタイトらしきもの、そして膝の下まであるようなブーツだ。ロングコートの裾や襟には金色の細かい刺繍が施してあり、無駄に高そうなイメージを与える。腰にも無駄に豪華そうなベルトがしてあった。

いかにも、中世を気取ったコスプレですが何か？……みたいな。何だこいつ。

それとも何だ、自分は600年前のフランス辺りにタイムスリップしたのだろうか。……いやいやいやありえない。

とりあえず男の顔を凝視する。やっぱり微動だにしなかった。眠っているように見えるが、それにしても背筋は伸びてるし首もまっすぐ前を向いている。目を閉じて何か瞑想をしているように見えなくもない。けれどとにかく、動かない。これは化石だろうか、秋は首を捻った。でも肌の色などからして死んでいるようには見えない。本当にその体勢のまま、生きてまま固まっているようなのだ。

『生きた化石』

そんな言葉が、秋の頭の中に浮かんだ。

男は整った顔立ちをしていた。色の白い肌に、繊細で形のいい部品がバランスよく並んでいる。伏せられたまつ毛は男のくせに長い。髪は白と黒を混ぜた灰色のような銀色で、肩の上で切られている短髪は真つすぐだ。少々癖の入った髪である秋が羨ましく思う程に。腕や肩は、服の上からでも鍛えていると分かる程引き締まっていた。歳は二十代後半くらいだろうか。

ますます何だこいつ。

秋はもつとよく見ようと男の前で屈んだ。と、こつんと音がして秋の膝と男の持つ剣がぶつかる。

「あ」

しまったと思つて秋が素早く飛び退つた時、男の目がぱちりと、それこそ瞑想が終わつたというように自然に開いた。見えたのは、青い瞳。

お互いにしばらく見つめあう。

「……お前が神の子か」

男の口が動いた。低く、落ち着いた声。どうやら生きて化石ではなかつたらしい。そう思ったが、とりあえず答えた。

「……いえ、人の子です」

「そうか」

男は少し笑つて立ち上がった。無駄にでかい。170センチと少しある秋よりも頭半分ほどは大きかった。

もし危ない人間だつたらどうしようかと、秋は警戒して身構えた。何しろ相手は鍛えられた体と使えるのかどうか分からないが剣を持つているのだ。飾るだけの剣だとしても、凶器には十分成り得る。しかも、多分だがコスプレをするような男だ。いや、コスプレを差別している訳ではないが、それでも危険度は一割程増す。男を調べ、る前に出口を探すべきだつたと、秋は今更ながら後悔した。

04 (後書き)

やっとこさメイン其の二の男が出てきた。長かった。

これからこの男と長い付き合いになります。が、どうぞよろしく。

ちなみに、秋の口癖は「いやいやいや……」です。

はい、何度も出てきてますね。これからも何度も出てきます。しつこいですが。

立ち上がった男は、鮮やかな動作で手に持った剣を腰のベルトに差した。剣を抜かなくて良かったと秋がほっとしたのも束の間、男の視線が秋に注がれる。髪へ、顔へ、体へ。線をなぞるようなぶしつけな視線に、警戒感が増す。いや、出るべき所は全く出てないし、しかも線の分かりにくいジャージを着ているからまさか女だとは思われないだろうが、それでも女という性別は危険だ。いかに男女平等の世になったとはいえ、力で女が男に勝てるはずが無い訳だから。男は、一通り秋を検分した後、おかしそうに口の端を上げた。薄暗い部屋の中、銀色の髪がさらりと揺れる。薄笑い、というのが正しいその顔に、秋は自覚無しで眉を寄せた。

「……何をそんなに警戒している？」

秋の気持ちを見越したかのような男の言葉に、秋は一步足を引いて構えた。体術は義姉に問題無く使える位には教えてもらっている。

「いや、警戒するなと言う方が」

変でしょう？と言外に言葉を込めて、秋は男の青い目を見返した。薄笑いを浮かべたままの男は、その笑みをますます深くする。

「そういう所。……両方の親にそっくりだな」

秋は疑いのこもった視線で男を見つめた。この男は、死んだ両親を知っているのだろうか。

睨み合うように、秋と男は互いを無言で見つめ合った。野生の獣を思わせるような男の視線を、真っすぐに受け止める。獯猛な視線

けれどすぐに、男は秋から視線をそらした。なんだか睨めっこに勝ったような気分になって、少し嬉しくなる。

男は、いまだ身構えたままの秋を余所に、祭壇の裏へ回った。何をするつもりだろうかと緊張する秋の目の前で祭壇の上の部分を引っ張り上げる。難なく開いたその中から、男は使い古したコートのような衣服と鞘に入った小ぶりの短剣を取り出した。どうやら祭壇は櫃としても兼用していたらしい。

目を丸くする秋に、男はコートと短剣を投げて寄こした。一瞬迷ったものの綺麗にキャッチした秋を見て、男はまた笑った。今度は薄笑いではなく普通の笑みだったが、それはすぐに消えた。

「警戒されていてはお前だけではなくこちらが困る。俺の名はフィリアスだ。……お前は？」

再び寄こされた視線にたじろぐ。その声には、答えなければ許さないとというような響きがあった。他人に命令することに慣れている響きだ。腹が立つ。秋は受け取ったコートを捨て、短剣をいつでも抜けるように構えた。男、フィリアスの眉が面白そうに上がる。

「俺は礼儀としてお前の名を聞く前に自分の名を言った。次にお前が名を言うのは当たり前だろう？」

猫なで声に、ぞわりと体中の毛が逆立つような感じを覚えた。ぶっきらぼうに言葉を返す。

「礼儀以前に、私はあなたを知りませんから」

「生憎と、俺はお前も、お前の親も知っている」

「私があなただを知らないんです」

当たり前だ。コスプレ男を知っている筈がない。繰り返すと、フィ

リアスは面倒そうに舌打ちをした。優梨辺りが見たら悲鳴を上げそうな視線が秋を刺す。

一歩一歩近付いてくるフィリアスに、秋は警戒感を増して後ずさった。兄のおかげで刃物の扱いも人並み以上には心得ている。実際に使うのは初めてだったが。

「ここは、お前にとっても俺にとっても敵国だ」
「は？」

何を言っているのだろう、この男は。日本は現在どこの国とも戦争はしていない。むしろ終戦は何年も前の話だ。戦争体験者がいなくなる、問題になっていくぐらいなのに。この男、中世ごろまでもしているのだろうか。

「お前、どこの国の人間だ」
「日本ですが」

見れば分かるだろうと、半眼で答える。

「そうか。……俺は、そのニホンという国を知らない」
「え」

全く意味の分からない言葉に、秋は呆気に取られた。日本は世界的にも有名なはずだが、フィリアスは至って真剣だ。本当に中世ヨーロッパにタイムスリップしたのかと思う。けれど彼の話す言葉は間違いなく日本語だ。信じられない。

「俺にとってニホンという国がある世界は異世界だ。今来たばかりのお前にとっては、この世界が異世界だろうな」

異世界？どこのファンタジーだと困惑する秋に、フィリアスは言葉が続けた。

「俺はこの世界のフィアナという国の人間だ。今俺達がいるのは敵国であるシャルキ。……お前、異世界で命を狙われなかったか？」

瞬間的に、優梨が頭の中に浮かんだ。表情で分かったのか、フィリアスが頷く。

「そいつは確実にシャルキの人間だ。そいつの名は？」

迷ったが、男の真剣な声に押されて秋はぼそりと答えた。

「……優梨」

フィリアスは顎に手を当てると、なるほどと呟いた。

「多分、そいつの本名はユーリ・パディアスだな。シャルキでは高位の神官の娘だ。そいつなら、お前のいた異世界にも行ける力があるだろう。あいつ、俺が見た時は赤ん坊だったが」

苦々しげな声に、秋は動揺した。フィリアスの言葉を信じるべきか否か。優梨のあの攻撃も、あの青い円も、普通なら信じられない話だ。けれど秋は自分の目でそれを確かに見た。これで異世界があると、自分がそこに来てしまったと聞いてもおかしくは無いような気がする。

さっきまでの真剣な顔はどこへやら、またあの薄笑いを唇に乗せて、フィリアスは言った。

「どうだ、名を言う気になったか」

「……秋です」

今秋がいる場所が異世界かどうかはこの目で見なければ信じられないが、実際に殺されそうになったのは確かなのだ。秋はフィリアスを完全に信じてはいなかったが名前を言うくらいはいいだろうと思う。それにどうやらこの男は今の所自分を傷つける気はなさそうだった。

シュウ、とフィリアスは少し言いにくそうに呟き、秋が捨てたコートを指差した。

「シャルキでは黒髪は邪悪の象徴だ。それを着てフードを被れ」

今度は素直に言うことに従った。短剣を下ろして古びたコートを手にし、手早く身に付ける。そしてしっかりとフードを被った。

その時だった。

この部屋の外、ずっと遠くを誰かが駆け抜けて行く音が聞こえた。緊迫して叫ぶ声も。

『ユーリ様がお帰りになられましたっ！！』

ユーリが帰ってきたと叫ぶ声は、それを何度も繰り返しながら段々と小さくなっていった。

「帰ってきたか」

部屋に落ちた沈黙を低い声で破り、フィリアスは秋の方へ視線を寄こした。フードを被った頭のでっぺんから始まった視線は秋の足で止まる。

「……異世界の人間は靴を履かないのか」

慌てて自分の足を見下ろした秋は、高校の玄関で脱ぎ捨ててからずっと靴下だけだったのを思い出した。何か色々ありすぎてすっかり忘れていた。

「……私が偶然履いてないだけです」

「そうか」

フィリアスは再び祭壇の上部を開くと、これまた古びて色褪せたブーツを取り出した。コート、短剣に続いて今度はブーツ。まるで何も持たない異世界人が来ることを見越していたかのように何でそんなにいるとしまっであるんだといぶかしむ秋に、フィリアスはブーツをぞんざいに投げて寄こした。

「履け」

またもや放たれた命令口調に少しむっとしながらもしっかりと受け

取った秋は、庶民の感でそのブーツがお高い物であることに気付いた。靴紐も色褪せてよれよれではあったが、ブーツ本体はしっかりと形を保っており、黒い、多分皮であるだろう素材は鈍いながらも光を放っていた。見直してみれば、コートも短剣もそこら辺で大量生産されているような物には見えない。

今更ながら気後れを感じたが、秋はそれに気付かないふりをして持ち主不明のブーツに足を入れた。こういう場合、気にした方が負けなのだ。

改めて自分の姿を気にした秋は内心でため息を吐いた。フィリアスから渡された物はどれもこれも形が中世っぽい。なんだか秋自身もコスプレをしているような気分になってきた。似合う似合わないは別として、同学年の子達に見られたら失笑を買いそうだ。だが、まあこれも非日常の延長だと考えれば大したことではない。信じられないが黒髪が邪悪として見られるのならこのコートがあるのは助かるし、短剣も持つてるだけで安心する。ブーツだって、歩きやすいから問題はない。驚いたことに、コートもブーツも秋の体のサイズにぴったりだった。

装備した秋の姿を見たフィリアスはまた口の端を上げて嫌な笑いを浮かべた。まともに見られる状態ではないだろうとは思っていたが、実際にこういう反応をされると腹が立つ。秋はフードの下からフィリアスを睨んだが、当の本人は気付いていないようだった。

「まあ、それなら大丈夫だろう。……まずはこの城から出るぞ」

城。

その単語に秋は耳を疑った。この世界に城があるのはいいとして、遺物と化してはいるが現代にも城はある。だが、さっきこの男は今自分達がいるのは敵国だと言わなかったか。何でわざわざ敵国の城中にいるのだろう。この男、実は偵察か何かだろうか。

そんな秋の疑問を知ってか知らずか、何も言わずにフィリアスは

コートを翻した。何をするのかと見つめる秋の前で、祭壇の後ろの何も無いつるつるの壁に手を這わせる。すぐに、探していたものを見つけたのかフィリアスはにやりと笑った。そして、不意にその前でパンっという乾いた音を部屋に響かせて勢いよく両手を打ち鳴らした。

瞬間、ブチイっとかかが裂けるような音がし、同時にフィリアスの前で青い稲妻が弾ける。一瞬の後には、そこに頑丈な扉が出現していた。

……何はともあれ、出口は確保された訳だ。

フィリアスが言う通りここが本当に異世界なら扉の向こうには一体どんな光景があるのだろうか。

秋は首を振った。何がどうなるうとどうにでもなれだ。

扉を前にして、フィリアスが秋の方を振り返った。

「一応聞いておくが、お前、それを使えるな？」

一瞬きよんとした秋は、『それ』が秋が手に握る短剣のことだと理解し、小さく頷いた。

刃物の扱いは、小さい頃から兄にしつこい程教えられてきた。刃物といっても使っていたのは竹刀や木刀だったが、まあ短剣も秋にとっては似たような物だ。複数の男が相手に無ければ十分正当防衛はできると自負している。

「俺が先に行く。なるべくお前の方には兵が行かないようにするが、もし来た場合は……好きにしろ」

もう一度頷いた。兵とやらが後ろから秋を狙う可能性もある十分ある訳だ。好きにしろというのは、正当防衛を口実に思う存分暴れてもいいぜという意味なのだろう。生憎、秋は人相手にドカバキグシャッとやりたい程溜まっではないが。

「見つかるまではなるべく隠れて行く。着いてこい」

何か見つかるのが前提のようだ。

が、秋が頷くのを確認する前に、フィリアスは扉を開いた。勢いよく飛び出した彼の後に秋も続く。

フィリアスの横から最初に見えたのは、前方に長く続く薄暗い廊下だった。同じ大きさの窓が左の壁にずっと並んでいる人気のない廊下。いつの間にか夜になっていたらしく、その窓から入る月の光に廊下がぼんやりと染まっていた。右手の壁には何も無く、大理石のような白は滑らかだ。真っすぐな廊下の先には小さく扉が見える。どうやらまずはそこへ向かって走るらしい。

何にせよ、見覚えのある物は何一つ無かった。もしかしたら学校の廊下かも、という秋の希望は砕け散った。

音を立てずに走るフィリアスの背中を見つめて、秋はつくづくと訳の分からないことになったと思う。殺されそうになり転送され、異世界だと言われた上にこの脱出劇。滅多なことでは驚きが顔に出ないと言われる秋だったが、正直な所これには頭が文字通りに破裂しそうだった。できるだけ早く兄と義姉のいる家に戻りたかったが、とりあえずはこの城とやらから出ないことにはどうしようもない。

二つの階段を下りて三つの扉を抜け、いくつかの廊下を曲がった時、初めて人の気配がした。目前にある扉の向こう、男の声がした。若い男の声と、しわがれた老年の男の声。扉を守る衛兵だろうか、木の扉一枚を隔ててわずかに会話が聞こえてくる。

「……り様は失敗なさったと聞きました。とすれば、あの国が動きだすということなんですよね？」

「ああ、そういうことになるな」

「前王はあの国を落とそうと躍起だったと聞きます。ヴェルディア王もそうでしょうか？」

「光と影を統合させるといふのは魅力的な話だからな。だが今回は難しいだろう。なにしろ悪魔の……」

その時不意に、フィリアスが何も言わずに扉を開いた。

あ、と思う間もなくバキツ、ドサツという音が秋の耳に届く。フィリアスの真後ろにいた秋には見えなかったが、音から判断するにどうやら二人を昏倒させたらしい。ひよっこりと顔をのぞかせると案の定、テレビでしか見ないような鎧を着た男が二人、床に倒れていた。地面が絨毯に変わっていた為、倒れた音はあまり響かなかった。

それにしても何という早業。遺憾ながら秋は感嘆した。体術はできるし、どこを狙えば一発で人が気を失うかも分かる。けれどそれにしても、あまりにも速かった。扉を開いた瞬間に倒したようなものだ。

フィリアスが二人を扉の内側へ引つ張りこもった時、廊下を曲がった奥の方から複数の足音と声が聞こえてきた。それらはどやどやとこちらへ近付いてくる。

「……間が悪い」

表情を変えずに吐き捨てたフィリアスを手伝い、秋も兵士達を引っ張る。

鎧のせいで無駄に重い兵士をなんとか引つ張りこみ、扉を閉めた瞬間、はっきりとした声が聞こえた。

「おい、あの扉を守る衛兵はどうした」

威張った男の声。フィリアスが秋の隣で舌打ちをするのが聞こえた。

「え？あれ、おかしいですね。ちゃんと配属されてるはずなのに。」

……扉の中でしょうか」

「困るよ君。外を守る衛兵が中にいてどうするんだ」
「すみません、閣下。あ、わたくしが開けますゆえ」

集団を離れて、一人の足音が秋とフィリアスと昏倒した兵士達のいる扉へと近付いてくる。後ろを振り返るが、廊下を曲がれるまでが遠い。もちろんそこまでに逃げ込めそうな他の扉はなかった。

これは中々危ない状況なのでは？

とりあえずフィリアスを見上げれば、これ以上ない程の渋面を作っていた。けれどどこか楽しそうに青い目が輝いている。渋面のくせして野生獣が舌なめずりしているように見えるのはなぜだろう。
どうやらこの男、秋とは違って複数の人間相手にドカバキグシャっとやりたいくらいには溜まっているらしい。

「……強行突破ですか」

答えは分かっているような気がしたが一応聞いてみれば、一言、
ああ、という簡潔な答えが返ってきた。

強行突破。まさにその言葉の通りだった。

扉を開けた青年を一発で昏倒。同時に飛び出し、目を白黒させる閣下とやらを、これまた一発で昏倒。けれど傍にいたお付きの人間に拳を振るう前に大声を出されてしまい、城の中においてはいけないはずの人間がいることは瞬く間に伝わってしまった。

もう音を立てずに走るなどということに気を払う余地はない。周りの景観を眺めるなんて論外だった。フィリアスは秋が女だと知らないせいか、中々遠慮なしのスピードで走る。陸上部員で良かったと今更ながら思いつつ、秋は一寸も離れることなくフィリアスの後にびったりとくっついて走った。

秋の方へはなるべく兵が行かないようにすると言ったフィリアスの言葉は嘘ではなかったらしく、前方からくる人間から秋へ攻撃がくることは全くなかった。おかげで秋が気を付けていればいいのは後方の人間のみ。それも、重い鎧を着けた衛兵が秋達の速さに追いつくことは難しく、ほとんど無かった。鎧なんて不便な物だ。まあ何にせよ、つまり秋はただ遅れないようにフィリアスの後を走れば良かった。

階段をほぼ飛び降りるようにして駆け下り、よく迷わないこの男と感嘆しながらいくつもの廊下を曲がった時、息一つ乱さずにフィリアスがぼそりと言った。

「門は近い」

どう返せばいいのかわからなかったが、秋も息を乱さずに答えた。

「そうですね」

頷いたフィリアスは額の中央に眉を寄せる。

「だが多分、すぐに来る」

何がだろ、と思う間は無かった。次の廊下の角を曲がった時、それは瞬時に理解できた。今までで一番広い廊下。奥には庭園らしきものが見えたが、その前に今までで最高数の兵がいた。屈強な、鍛えられた若い男達がざつと三十か。先頭に立っているのは、穩和そつな顔の青年を横に従えて、一番質の良さそつな、というか無駄に豪華な服を着た恰幅の良い男。三十代半ば位だろつか。フィリアスの持つ細身の剣とは違って刀身の広い大きな剣を腰に差している。これは、一番身分の高い人だなと何となく分かった。浮かぶ冷笑も纏う気配も、自分を偉い人間だと自覚している人間の物だ。体が横に広い分、フィリアスのそれよりもたちが悪い。

男はフィリアスの姿を認めると笑みを濃くした。

「本当に変わっていないな、フィリアス王」

フィリアス、王？

その言葉に、空気が張り詰めた。男の後ろに立つ兵達が一同に目を見開き、秋の横に立つフィリアスを見る。どうやらフィリアスは有名ならしい。男の言う通り、一国の王だとすれば当たり前か。秋はあつさりと納得した。これである、人に命令することに慣れている口調にも納得できる。

兵士達に注目されても素知らぬ顔のフィリアスは、男と同じく笑みを浮かべた。あの、気持ちの悪い薄笑いだ。

「そちらは随分と変わったな、ヴェルディア王。いつの間に王になったのやら」

「十年前だ。そちらが我が城内で眠っている間にな」

ヴェルディア王は皮肉気に笑った。フィリアスもそれに答えて笑う。敵対する国の王二人がお互いに気味の悪い笑みを浮かべているのは気持ち悪く、秋は思わずフードの下で半眼になった。見つめ合う、というよりは一方的にフィリアスを睨みつけながら、ヴェルディア王が言葉を続ける。

「まあ、そのおかげで状況が変わった。我が父が落とせなかった貴様の国を、今度は私が落として見せようではないか」

「これはこれは。ヴェルディア王には俺の国を落とせるだけの、随分と自信のある勝算がありがたいようだ」

「その通りだ」

ヴェルディア王は自身の後ろにいた人物を己の前へ引つ張り出した。白いローブに白い杖を持った人物。茶色っぽい色だったはずの髪はフィリアスの灰色に近い髪とは違い、白に近い輝く銀髪へと変化していた。二つに結ばれていたそれは、解かれて背中に流されている。見覚えのある姿よりずっと変わっていたが、その人物の顔はよく見知ったものだった。

あの、泣きそうだった顔が秋の頭に浮かぶ。今の彼女は、無表情だった。けれどその顔は意識的に作っていると感じた。杖を、手が白くなる程握っているのがその証だ。

今彼女が目の前にいるということ。それは、優梨がフィリアスから聞いたユーリという人物と同一であることの何よりの証明だった。それに気付き、思わず彼女の名前を呼ぼうとした秋はいけない、と慌てて口をつぐんだ。

「貴様の国に悪魔デイスタの子が産まれたのと同様、我が国には神ヴェスタの子が産まれた」

「産まれた？」

フィリアスは、はっと嘲るように笑った。

「俺の記憶によると、パディアス家の一人娘は茶の髪だったはずだ。『産まれた』ではなく『造り出した』の間違いだろう」

ぴくりと、優梨の体が動いた。顔がいびつに歪む。それに気付かず、ヴェルディア王は口を開いた。

「持つ力は大差ない。重要なのはそれだろうか？」

その手が優梨の肩に置かれる。再び、その体がぴくりと動いた。

「違ういな。だがその神の子はヴェスタはお前達の言うデイスタ悪魔の子を殺せなかった」

「一度でやれるなどとは信じていなかった。予言に刃向うことができるとは思っていないからな」

ヴェルディア王はにやりと笑い、勝ち誇ったように言葉を続けた。

「だがその予言は、悪魔の子を殺せないとは言わなかった」

優梨の耳に口を寄せ、何事かを言う。無表情を作り直した優梨は、こくりとヴェルディア王の言葉に従順に頷き、杖を握り直した。瞬間、空気力が優梨へと集まっていくのを秋は感じた。その口が、いつか聞いたものと似たような呪文を唱える。秋は彼女を凝視して動けなくなった。

優梨がまた秋を攻撃しようとしている。その事実にも動けなくなった。以前とは違って、今の優梨は秋を攻撃することに迷いはないように見えた。

彼女を凝視する秋の肩に何かが置かれ、秋ははっと我に返った。慌ててそちらを見やるとフィリアスが真つすぐに秋を見ていた。また、楽しそうに目が光っている。

「あの中庭まで逃げるぞ」

前方を見る。どうやっても兵士とぶつからない訳にはいかなさそうだった。つまり、再び強行突破だ。

短剣を握りしめ、頭の片隅に優梨の無表情を追いやって秋はしっかりと頷いた。それにフィリアスも頷き返す。

「……着いてこい」
「分かりました」

フィリアスが走り出した瞬間、王の後ろにいた兵士達が剣を抜いた。それを見て、フィリアス自身も剣を抜く。長い剣だった。所々にある松明の炎を受けて輝くすらりとした剣。

これは、流血沙汰になりそうだ。

現代日本ではありえない光景を目前にしても、秋の脳内はしっかりしていた。……というより何だかもう、脳みそが爆発しそうなものを通り越して消滅したような気がする。どうしたってどうにかならないことはないのだから、どうにでもなれだ。

今度は人数が人数なだけ、フィリアス一人が全てを相手にするという訳にはいかなかった。先頭に立つフィリアスではなく、後ろに続く秋を狙って来る兵士もいる。人に暴力を振るうというのは少し躊躇するが、自分が刺されそうになってはそんなことも言えない。迫ってくる剣刃を受け止め、横に流し、素早く相手の腹の内に入っ
て短剣の柄で鎧の継ぎ目を強打する。ぐふっという呻き声と共に、向かってきたその男は床に落ちた。敏捷性には自信があるのだ。何だか体も軽いし、体調も万全だ。今の秋は負ける気がしなかった。

その時、後方で優梨の声がした。

「皆さん離れて下さいっ!!!」

良く分からないが呪文を唱え終わったらしい。体内の血が燃えるような感覚に、秋は知らず笑みを浮かべて振り返った。純白の杖を構え、秋と一直線上に立つ優梨。兵士達が離れたせいで間には誰もいない。真っすぐに見やると、フードのせいで顔が見えないはずなのに優梨が少したじろいだのが分かった。が、すれもすぐに無表情の内に消える。優梨が大きく杖を振る。直後、すさまじい風が巻き起こり、秋のコートの裾を音を立ててはためかせた。空気が凝縮された塊が真っすぐに秋を目がけて向かって来る。ただの暴風などとは比べ物にならない威力の空気の塊。直撃したらぺちゃんこだ。

「おい。避け……」

後ろでフィリアスが言うのが聞こえたが、無視した。体が熱い。体内に力が満ちる。

空気の塊を目前に、手にした短剣の刃を前方に向け、秋は横に切り裂くように、向かって来るものを一文字に大きく切った。

轟音と共に吹き荒れる風。そのあまりの強さに、距離を置いていた兵士達が思わず地面に突っ伏す。

それには構わず、秋は優梨に背を向けた。心臓がうるさく胸を叩いていたが、体に傷は負っていない。

目が合うと、フィリアスが口の端を上げた。やっぱり嫌な笑いだっただが、沸騰した血のせいで気にならなかった。

「良くやった」

「どうも」

ぼそりと言われた言葉に、秋はそう返した。

07 (後書き)

何だか一話一話がどんどん長くなっていくような気が。
えっと、……まあ、気にしないで下さい。
序章はもつちよっと続きます。

秋が切った空気の塊は思っていた以上の強風となって兵士達を殴打したらしい。迫ってくる者がいない中、秋はフィリアスの後について長い廊下を駆け抜けて中庭に出た。

柔らかい感触をブーツの裏に感じて足元を見れば、月明かりに浮かびあがる芝生が見えた。周りを見回すと、王宮庭園と呼ぶにふさわしい光景が広がっている。

城の柱に囲まれた庭園は広大だった。赤や白の薔薇があり、見たことのない鮮やかな色をした花の蕾がそこかしこにある。水の音がする方を見れば、大きな噴水が月光を浴びてきらきら光る水しぶきを放っていた。

この時間帯でも息を飲むほど美しかったが、昼間の日の光の下、全ての花が蕾を開いた状態だったらどちらが素晴らしいだろうかと思わず想像してしまう。中世ヨーロッパの王族や貴族はこういう場所でお茶会をしたんだと、秋は内心で頷いた。こんな状況でなければ社会見学気分で楽しめただろうに、惜しいことだ。

横に立つフィリアスを見れば、彼は庭園ではなく上空を見ていた。空に何かあるのだろうか、秋も上を見上げる。

知らず、息を飲んだ。

紺色の空には、見たことがないほどたくさんの星が輝いていた。ちかちかと瞬く星。青やオレンジに光る星。それらを従えて強烈に輝く三日月もまた、美しかった。夜に、電灯ではなく星が、月が存在感を増すというのはなんて神秘的だろう。山の上や田舎に行くと都会では見られない数の星があるとは聞いたが、よもやこれ程とはいうか、山の上でも田舎でもない異世界でこんな夜空が見られるとは。何だか得したような気分だ。

ますます、こんな状況じゃなかったらという思いが、遠くから聞こえてくる兵士達の声で秋の中に沸き起こった。横を見れば、まだフィリアスは上空を見ている。まさか彼も星空に見惚れていた訳ではないだろうともう一度彼の視線をたどった時、秋はそれを見た。黒い、影。

翼を広げた鳥に似ているような気がするが全然違う。上空にある月のせいで黒く見えるその生物は、首が長く尾があるように見える。秋はそれを凝視した。何だろうあれは。

異世界、剣、魔法、とくれば次は、……龍？いやいやいや嘘だろう。さすがにそれは……ねえ？

けれど嘘には見えなかった。フィリアスはその影に向かって叫んだ。

「ロダー！」

声が聞こえたのか、その龍らしき生物は庭園の上空を旋回し始めた。旋回しながら、すごい速さでこちらへ降りてくる。かすかに、空気を切る翼の音が聞こえた。

こちらに近付いてくれば近付いてくる程、秋にはそれが龍以外の何にも見えなくなった。

蛇やら蜥蜴やらに似た、鱗のある硬そうな爬虫類独特の皮膚。先が鋭く尖った尾と耳。鉤爪の生えた足。大きく広がったコウモリの翼。完璧に龍だ。龍と呼ばなくて何と呼ぼうか。

上空から庭園の芝生の上に降り立った龍は、伸ばしたフィリアスの手に鼻を寄せた。近くで見ると、本に出てくるドラゴン程大きくはない。高校の教室に余裕で収まる位だろう。

瞳孔の開いた緑色の宝石のような瞳が秋を見てきたので、秋は同じようにじつと見返した。

綺麗な目だった。吸い込まれそうな、濃い緑。

暫くの間見つめ合っていると、不意に龍が視線を外し、鼻面をフ

イリアスの方から秋へと向けた。鼻息がかかる。さっきのフィリアスのように腕を伸ばせば、ためらいなく龍は秋の手に鼻を寄せてきた。鱗で覆われている分少々硬いが、巨大な犬のように思えなくもない。じつと見れば、かわいくないこともない。

……未知の生物万歳。

「シュウ」

フィリアスの声ではつとした。声の聞こえてくる方へ目をやれば、いつの間にかフィリアスは龍の胴体の上に乗っている。城の廊下を見れば、半分位に減った兵士達がこちらへ向かって走ってきていた。

「こいつに乗って俺の国へ行く。来い」

フィリアスが自身の前を叩く。どうやらそこに座れということらしい。

龍の上に座るとは。もしかこいつで空を飛ぶのだろうか。何と云うか、ブ、ブラボー！

秋を引つ張り上げようとしたのだろうか、フィリアスがこちらへ手を伸ばしかけたが、その前に秋は軽くジャンプして、すんとフィリアスの前へ座った。違和感を感じる。兵士達と戦った時も思ったが、やっぱり体が異常に軽い。異世界だから重力とかも元いた世界と違うのかも知れない。

首を捻った秋は不意にふわりと浮く感じを覚え、慌てて落ちないように目前の龍の首を掴んだ。バサッバサッと翼の音がし、見れば地面から離れている。飛行機以外で空を飛ぶのは初めてだ。少しわくわくする気持ちを抑えて、秋は振り返った。つい声が出そうになつて、秋は慌てて口を閉じた。

遠く、額から血を流した優梨が、こちらを見ていた。依然として秋はフードを被っていたが、それでも優梨と目が合ったような気が

した。

「ゆづ……」

名前を呼びそうになったが、何とか押し留めて首を振った。呼んではいけない。

歯を噛みしめて顔を前方へと戻す。すぐるような視線が首をさしたが、自分に言い聞かせて気が付かないふりをした。

高度が高くなって頭上の星が近付き、耐えられなくなって振り返った時にはもう、優梨の姿は見えなかった。

何も言わずに上空の星を見上げたり眼下に広がる街を見る少年の背中を、フィリアスは見つめた。同じ男のくせに呆れる程細いこの体に、高位の魔術攻撃を短剣一つで切り裂き、大の男を昏倒させ、自分の頭よりも高い位置にある翼龍の背中に簡単に飛び乗り、しかも使用人の誰にも懐かない口ダを手なずける力があるとは到底思えない。

フィリアスの脳裏に、とある男女の姿が浮かんだ。

そうだ。そういえば彼等も、一見では剣士だと分からないような見た目だった。

この少年、そういう所もそっくりだ。

警戒心を露わに短剣を構えた姿を思い出し、フィリアスは思わず声を出さずに笑った。今この細い背中に剣を突き付けたらどんな表情をするだろう。フィリアスが王だと知っても特に何の反応も示さなかったこの少年。この細い背にひやりとした刀身を当てれば、絶

望に染まった顔をするだろうか。黒い瞳が暗く陰り、白く整った顔が歪むのも見てみたい気がする。

想像して、フィリアスはぞくぞくとした何か背中を駆け抜けるのを感じた。綺麗なものが汚される様には強く惹きつけられる独特の魅力があるものだ。少年の顔が整いすぎているのが悪い。

そう、シユウという少年はあまりにも整いすぎていた。男としてではなく、中性的にだ。合ったドレスを着せれば確率的に美少女にも見えるだろう。所々跳ねている髪はどこか愛嬌があり、それと同色の目も大きくて美しい。それと正反対に白い肌は傷一つなく、サテンのように滑らかで、女共が羨ましがるのは間違いない。体も男の割には細すぎるが均整がとれていて、繊細なようだがすらりとした手足に溢れる力がそうは思わせない。全体的に、まるで人形のような。計算されたかのような体。

とにかく、どこをとっても美しかった。

その時突然強い向かい風が吹き、目の前の少年の頭からフードを取り払った。肩より少し上の黒髪が風になびく。慌ててフードをかぶり直そうとするシユウの手を、フィリアスは知らないうちに止めていた。あまりに細い手首に驚く。

振り返る彼に、フィリアスは口の端を上げた。視線で問うてくるシユウに、手首を離す。

「俺の国ではフードを被る必要はない」

「そうですか」

そっけなくそう言って視線を前方へ戻す少年に、フィリアスはなぜか苛立った。

あの部屋で向けられた、真つすくな視線を思い出す。強い光を宿した、真つすくな目。思わず見惚れた目だ。男には欠片も興味が無いフィリアスが、素直に美しいと思った。

美しい？

思わず鼻で笑った。聞こえなかったのか、シユウの姿勢は変わらない。まさか自分が同性に対して美しいなどというようなことを思うようになるとは。

ある意味本当に悪魔デモタの子なのかもしれないな。

もう一度細い背中を見る。女のような細い背中。

ふと、もし女だったらと思った。

ぞくりと、肌があわだつ。それは、興奮に似た感覚だった。

もし女だったら。……自分はどうするだろう？

08 (後書き)

つまり秋はぺちゃんなんです。

「もう警戒はしないのか？」

眼下で陸が途切れて海になった頃、風を切って聞こえた低い声に、秋は後ろを振り返った。フードを取った視界は広く、星を背景にしたフィリアスがこちらを見ている。

「はい。とりあえずは」

まだ信用するに足るとは思っていないが、フィリアスは最低でも優梨のように秋を殺そうとは思っていないだろうから。

そう思って答えると、フィリアスはそうかと答えた。

「……ここが異世界だということ？」

「信じない訳にはいきませんね。私の世界にはこんな生物はいませんから」

龍の背中を軽く叩いて言うと、フィリアスは何か聞き慣れない言葉を言った。

「え？」

聞き返せば、今度ははっきりと聞こえた。

「シルナーダ翼龍、シルナーダと言う。こいつの名前はロダ、だ」

「翼龍シルナーダの……ロダ？」

「ああ。空という意味だ」
「空ロダ……」

小さく言えば、前方でロダが満足そうに低い声を鳴らすのが聞こえた。
空ロダ。

中々かわいい名前だ。秋はさつき秋の手にロダが鼻を寄せてきたのを思い出した。始めて出会った生物だし、短い付き合いではあるだろうが、仲良くなれそうだった。

異世界で未知の生物と仲良くなれるなんて素敵なことではないか。

二時間程飛んだ頃、視界の先の方に再び陸が見えてきた。もしかしてあれがと思うと同時に、フィリアスの声が聞こえる。

「あれがフィアナだ」

じっと見つめる。輝く星空の下、民家の明かりらしき光がぼつぼつと見えた。それは陸の奥へ行く程多くなり、ずっと遠く、中央に密集している。フィリアスの話によるとどうやらそこが国の中心部、王城がある場所らしい。

国の上空へ入り眼下を見下ろせば、やはり見たことのない形の家々が建っていた。どう思っても日本の住居ではない。もう異世界であると認めたのがっかりはしなかったが、ただ物珍しかった。

またしばらく飛ぶと、少しずつロダが高度を下げて行った。その頃にはもう城郭で囲まれた町の上空に入り、台地の上に建て

られた遠目にも立派な城が見えていた。白い石でできた城塞に囲まれ、同じ材料でできたいくつもの塔が連なった形のその城。屋根は鮮やかな青で塗られていた。城も、それを囲む城塞も、実際に見たことはないが中世ヨーロッパそのものの、見とれるような眺め。

再び見られるかどうか分からないので、秋はその光景をしっかりと目に焼き付けた。分からないが、多分城に着いたら元の世界に帰されるだろうと思っていただ。いや、むしろそうでないと困る。はっきりとした時間は分からないが、もう夜で、しかも結構遅い時間帯だ。心配性の上にシスコンの兄と義姉は今頃ぎゃあぎゃあ騒ぎ合っているに違いない。

ロダは城の端の方にある円柱の形をした塔の上で旋回を始めた。落ちると危ないと思ったのか、フィリアスの腕が秋の腹に回される。他人に触られるのに慣れていない為少し体が強張ったが、どうやらフィリアスはそれに気付いていないようだった。安心する。

塔の上には細い人影が一つあった。すぐにフィリアスがロダの上から下りた為、腕が離されたことにほっとしながら秋もそれに習う。長い間ずっと地面に足が付いていなかった為か少しバランスがぶれた。フィリアスが再び腕を伸ばしてきたが、それに支えられる前に持ち直した。一応フィリアスに頭を下げしておく。

静かに近付いてきた足音に顔を上げれば、月の光に似た長いストリートな金髪を首の後ろで一纏めにした青年が立っていた。優しく細まる瞳は理知的で、ロダのそれよりも色素の薄い緑色。武官というよりは文官といった様子の、いかにも好青年と言える男だった。

青年は地面に立ったフィリアスを見て頭を下げ、男としては少し高めの、けれど耳になじむ声を出した。

「無事なようですね、王」
「ああ」

そっけなく返したフィリアスはロダの鼻を撫でた。

「俺はこいつを厩舎に連れて行く。お前はシユウを連れてけ」
「分かりました」

フィリアスに背中を押され、青年の前へ押し出される。青年の目が秋にそそがれ、やがてその口元が綺麗に弧を描いた。一応初対面の人への礼儀正しい挨拶として、秋は頭を下げた。

「シユウ・カンザキと言います」

「これは丁寧。わたしはクレイジユ・リディアヌスです。クレイジユとお呼び下さい、シユウ殿」

敬称をつけられて驚いたが、クレイジユと名乗った青年がこちらへ、と歩きだしたので急いでその後ろに付いて行く。

ふと視線を感じて振り返れば、フィリアスの後を厩舎らしき方向へ向かおうとしていたロダが秋を見つめていた。その翡翠の瞳に思わず腕を伸ばせば、とととと歩いて近寄ってきたロダの硬い鼻が強く押し付けられる。犬よりはずとずとと巨大だとは言え、やはりかわいい。

自分の頬が緩むのを感じながら、秋はロダの鼻を撫でた。その目が細まる。と、突然鋭く尖った牙がのぞき、そこから出てきた湿った何かが秋の頬の上を滑った。

……どうやら頬を舐められたらしい。ますます超大型犬のようだ。後ろからクレイジユがこちらを見ているのに気付いて、秋はこれが最後とロダの鼻を一撫でした。その時ふと思いついて、近くにいたフィリアスに顔を向けた。視線と視線がぶつかる。

フィリアスは祭壇のある部屋で会った時から秋的にいけ好かない男ではあるが、殺されそうだった現状から救ってもらったことに変わりはない。

どんな相手にでも、何かしてもらったら礼儀正しくお礼を。
秋は背筋を伸ばして頭を下げた。日本人の感謝の示し方だ。

「助けて下さって、ありがとうございました」

はつきりと一言告げてから慌てて背を向け、数歩先の、なぜか吹き出しそうな顔をしているクレイジユの元へと駆け寄る。何かおかしかっただろうかとフィリアスを振り返れば、文字通り苦虫を噛み潰したような顔をしていたので、何だか見えてはいけないものを見たような気がして秋はクレイジユへと顔を戻した。

「すみません」

「……いえ」

クレイジユは秋が謝るとくしゃりと破顔し、秋の頭を手のひらでそっと叩くと塔の中へと歩き始めた。

やっと兄と義姉の待つ家へ帰れるだろうかと期待した秋の予想に反して、クレイジユは松明が赤々と燃える長い廊下を抜け、いくつかの階段を上って秋を城の内部の客室のような部屋へと連れて行った。草花の模様が刺繍された赤い絨毯が引かれ、天蓋付きのどこぞの国のお姫様が寝るようなベッドが設置された無駄に高そうな部屋だ。中では四十近い女性が何やら忙しげに動いていた。てつきり魔法陣の書かれた怪しげな部屋に連れて行かれると思っていた秋は肩透かしを食らったような気分になる。

「ここが、秋殿のお使い頂く部屋です」

クレイジユの、まるで秋が長期滞在するかのような口ぶりに戸惑った。

横に立つクレイジユを問うように見上げれば、彼は秋の困惑した瞳に気付いてきよと見返した。が、すぐにまさかと口ごもる。しばらくどう言い出せばいいのか分からないのか床に視線を彷徨わせていたが、やがてクレイジユは決心したように顔を上げ、おそろおそろというように口を開いた。

「まさかとは思いますが、その、……王は秋殿に何も？」

「何をですか？」

心底分らないという秋の口ぶりに、クレイジユは片手で顔を覆った。

一拍置いて、その形の良い口が、あの馬鹿王が、とかあの野郎押し付けやがって、というような、笑顔の似合う好青年には到底似合わない言葉をぶつぶつと吐き始める。

一つ大きなため息を吐いて、クレイジユは真剣な瞳で秋を見下ろした。

「詳しいことは明日にでも王から説明があるとは思いますが、その……」

口ごもるクレイジユに嫌な予感がする。その予感は当たっていた。

「秋殿が元の世界に帰れる可能性は、全くと言っていい程ありません」

「そうですね」

頭を殴られたような強い衝撃。

足元が冷えるような感覚。

それにも関わらず、秋の声は落ち着いていた。頭の中もはっきりしている。

一般的な女子高生ならここで気を失ったりするのだろうか、冷えた頭で考えた。秋には頑張ってもそれはできなさそうだった。泣き喚いてみるとか？それも無理だ。どうにもならないのなら泣いても喚いても意味はないではないか。

どうやら脳みそは、衝撃に対して麻痺することを覚えたらしかった。

思い出してみれば、昨日の優梨のお引越宣言から始まり、一体幾つの衝撃を受けたのか分からない程なのだ。いい加減秋の脳みそが衝撃に対して麻痺してもおかしくはない。人間成長する生物で良かった。……脳の麻痺を成長と言うのか分からないが。

すまなそうに、心配そうに秋を見下ろすクレイジユに、秋は自分は大丈夫だというように頭を下げた。何にせよこの青年は悪くない。まあ、誰が悪いと言うこともできないだろうが。

はつきり言ってしまったえば、秋も優梨のお引越に巻き込まれ、強制的にお引越させられたと、そういうことだろう。それも、戻れないお引越越した。これはもう国外亡命よりも大変なのではないか。

秋は内心で頭を抱えなくなった。

いやいやいや、本当に、どう反応すればいいのだろう、これは。

机に向かっていたフィリアスは、前方から空気を切り裂いて飛んでくる物を感じ、ひよいと身を屈めた。阻まれることなく真つすぐに飛んだそれは、後方にある壁に音を立てて突き刺さる。

……ちっ。

あからさまに聞こえた舌打ちに、フィリアスは顔を上げた。思った通り、そこには悔しげな表情を隠すことなくその整った顔に浮かべたクレイジユが分厚い紙の束を手に立っている。シユウに見せた優しいな雰囲気は宇宙のかなたに追いやったらしい。

フィリアスの口の端が自然と上がる。

「後にも先にもこの俺にナイフを投げる臣下はお前だけだ、クレイジユ」

「それは光栄だ、このたわけが」

吐き捨てながらつかつかと机まで歩み寄ってきたクレイジユは、細めた目でフィリアスを見下ろした。瞳の奥で怒りがくすぶっているのが分かる。

「どうかしたのか」

大体見当は付いていたがあえて聞いてみると、クレイジユはすつと息を吸い込んだ。

「押しつけやがってこのカス」

静かに放たれたその一言から始まり、クレイジユの口から国民に慕われる宰相とは思えない暴言が次々と飛び出す。

ふざけんじゃねえぞこのアホキング、厄介事だけこっちに回すな
って何度言ったら分かんたバカ、アホ、マヌケ、カスカスカカスカス。
てめえはジャガイモより格下だ、バーカ。このたわけの塊。

怒鳴る訳でもなく、淡々と呪文のように紡がれる暴言に、毎度のことながらうんざりする。実際はこの青年がどんな厄介事でも確実に処理すると、その能力を重く見て回しているのだが。そして本人もそれを知っている筈なのだが。それでも彼はフィリアスに面と向かって暴言を吐かなければ気が済まないらしい。しかもその暴言が毎回違うのだからレパトリーの多さに呆れると共に感嘆する。

しばらくして気が済んだのか、息をついたクレイジユにフィリアスは気になっていたことを聞いた。

「シユウはどうした」

「わたしに押し付けたあなたがそれを聞きますか」

きつ、とフィリアスを睨んだクレイジユだったが、口調が敬語に戻っているのは平生に戻った証拠だ。彼はそのまま深々とため息をつき、シユウが眠っている筈の、隣室へと続く扉へと目をやった。フィリアスもそれにつられて見る。

「驚くほど淡々としていましたよ。帰れないと聞いても『そうですか』の一言でしたし」

「そうか」

「ええ」

また怒りが湧いてきたのか、クレイジユは頷いてから一言、それもこれも全部お前のせいだマヌケと付け加えた。無駄にマヌケが強

調されている。

「……前から思っていたが、クレイジユ、お前は口が悪すぎる」
「平民出身ですから」

爽やかにそののたまった青年はそれに、と付け加えた。

「美しい言葉ばかり並べたてる貴族なんて、国の頂点に立つ王の傍にはいらなideしょうが」

言いながら、クレイジユはフィリアスの後ろ、壁に突き刺さったナイフの柄に手をかけた。

「……それにしても」

ぐっと力を入れると、ナイフは呆気なく抜ける。

「しっかりした子じゃないですか、王。いささかしっかりしすぎているとも言えますが。でもいい子です」

「ああ」

「吹き出さないようにするのに苦労しましたよ。礼を言われた時のあなたの顔と言ったら、それはもう……」

肩を震わすクレイジユに、フィリアスは渋面をつくる。確かにあの時、あのタイミングであんな礼を言われるとは思っていなかった為、まともな反応ができなかったのは確かだ。

「……忘れる」

「無理です。というか嫌です。鮮やかな思い出のメモリーに永久粘着剤でしっかり貼るとききましたから」

一般人が見たら一目散に逃げるだろう視線で睨みつけるフィリアスなどどこ吹く風というように、クレイジユは持っていた紙の束を机の上に置いた。

「本当に成長なされましたね、シュウ殿は。わたし達にとっては一日で大きくなられたようなものですが」

フィリアスの脳裏に、ロダの上でこちらに振り向いた少年の顔が浮かぶ。

柔らかかそうな黒髪が、夜風にそよいでいた。光を受けて白い肌は輝いていた。真つすぐな目が、フィリアスをじっと見ていた。

知っている彼に、そっくりな顔のつくり。知っている彼女に、そっくりな目。

自然、フィリアスの眉が額の中央に寄った。

「お二人が、一人になって帰ってきたような錯覚でしたよ。あの落ち着きようはセイジア様ゆずり、動物に好かれるのはリギン様ゆずり、ですかね」

感慨深そうに言ったクレイジユは、紙の束から一枚取り出した。それをフィリアスに、どうぞと手渡す。

「目覚めてからすぐにリシュールに部下を行かせました。……あれから、一六年だそうですね」

一六年。とすればあの少年の歳は一七か。

どうやらクレイジユも同じことを考えたらしい。

「大きくなられた筈ですよね」

そうだ。あれから一六年。

崖っぷちの、生きるか死ぬかの危機的状況は過ぎ去った。けれどまだ気は抜けない。

国の存亡はこれからにかかっている。

『我が父が落とせなかった貴様の国を、今度は私が落として見せようではないか』

ヴェルディアのあの言葉は嘘ではないだろう。

それならば、やるべきことはただ一つしかない。

軽く力を入れれば、扉は音も無く開いた。鍵が掛けられていなかったことになぜかほっとする。

光の灯る自分の部屋とは違い、シユウの部屋の光源は窓から入る月と星の光だけだ。奥に置かれたベッドの上、白いシーツにくるまる少年の体の形が硬質な刃のような光に浮かび上がっている。

フィリアスが足音を殺して近付いても、彼が目覚める様子はなかった。

それも無理はない。いきなり異世界とやらに來させられ、いきなり命を狙われ、最後には帰れないと告げられたのだ。一七歳の少年には耐えられない衝撃だろう。

この時間だけでも、全てを忘れていられるのなら彼にとって悪い

ことではない。

無自覚の遠慮のせいか、広いベッドの端の方で眠っている為、大部分が余っていた。

見下ろせば、シユウのあどけない表情が見えた。

一七と言えばちょうど子供と大人の境目だが、そんな目で見れば彼はいささか成長が遅いように見えた。背はフィリアスよりも幾分小さいくらいだが、何より顔立ちがまだ子供っぽい。唯一年齢に似合わない強い光を持つ目が閉じられているせいで、寝顔の子供っぽさは強調されていた。

それでもやはり、美しい。

もっと成長すれば、国の女達を色めき立たせるであろうことは間違いないかった。

端正。精悍。どんな単語がこの少年に似合うだろう。

フィリアスはじつとシユウを見つめた。少し癖の入った髪が、シートの上に散らばっている。ストレートではないゆえの、柔らかそうな手触りの髪。

その質感を直に感じたかと思わず手を伸ばそうとした時、仰向けに寝ていたシユウが寝返りをうった。

「ん……」

彼の口から漏れた女のような声に、心臓が強く胸を打つ。思わず首筋に目が行った。筋の浮き出た白い首。……まるで女のように細い。投げ出された手も同じく。

視線を下に移すと、シートの上からでもしっかりと引き締まった両足の形が見えた。首や腕と同じように白いだろっことを断定させるすらりとした足。

体に熱がたまっていく。シートを剥ぎ取りたい衝動。

フィリアスの口元が獰猛な笑みを形作った。

どうやら自分は相当たまっているらしい。……同性を見て欲情す

るほどに。

フィリアスは再び手を伸ばし、少年の形の良い頭を軽く撫でた。思った通り、柔らかい感触。

すぐに背を向け、自分の部屋には戻らずにそのまま廊下へと続く扉を開けて外に出た。と、ちょうど廊下を通りかかったクレイジユと鉢合わせした。彼の目がぎょっと見開かれる。

「どっから出てくるんですか、王。まさか……」

「同性に興味はない」

続く言葉を一刀両断すると、クレイジユはほっと息を吐いた。その脇を通り過ぎたフィリアスの背に彼の声が続く。

「王、今からどこへ？」

「街へ行く」

「……今からですか」

真夜中に街に行くとしたら理由は一つしかない。

全てを理解したような表情を見せたクレイジユは、軽く息をはい

「今日あちらの国で殺ってこなかったんですか」

「血を見て騒がれては面倒だからな」

「それ位で騒ぐような子ではないと思いますが、そうですね。シユウ殿に気を使ったことに関しては褒めて差し上げます」

フィリアスはふん、と鼻を鳴らした。クレイジユの感に触る物言いも気にならなかつた。とにかく今は、人を殺れなかつた分、体にたまったものを他のことで吐き出さなくてはいけない。

「前から聞いたかつたんですが、王」

クレイジユの言葉に、これからのことを思っただけ嫌が悪くなかった
フィリアスは珍しく振り向いた。

「何だ」

「あなたまさか、人を剣で刺すことと女性と体を繋げる感覚は同じ
だと思っただけせん？」

「お前は違うのか」

当たり前を通り越して世界の定理だとしても言いたそうな口調に、
クレイジユはため息をついた。

やってることを考えれば確かに似たようなものかもしれないが。

でも。しかし。クレイジユには全く理解できなかった。いや、き
つとクレイジユだけではないだろう。世界の大部分の男はきつと理
解できない。

「もういいです。……ちゃんとかつらかぶって下さいよ？そん
な髪の色人間はそうそういませんから」

「ああ」

声にどこか嬉しそうな響きを持たせて、フィリアスは去っていつ
た。

後方でフィリアスの背中を見送ったクレイジユは、シユウが眠っ
ているはずの部屋の扉を見つめ、そして決意した。

あの方に言われた通り。あの子の本当の性別を何が何でも隠し通
そう、と。

扉から姿を現したのは、時が経っても変わらない青年だった。

いや、全く変わっていない訳ではない。ただ、彼を彼だと特徴づけるものが何ら変わっていないだけだ。むしろ精悍さは以前よりも増しているし、どれ程表情が穏和であれ、昔よりも断然『男』を感じさせる空気をその細い身に纏っている。

思わず、顔が熱くなった。

知らず、手に持つ袋を握り締めていた。

さっきも近くにいたはずだが、けれどさっきと今では状況が違う。彼の目は今、じっとユーリを見つめていた。静かな光をたたえた深淵のような目。懐かしい。

その目が優しくに細められた瞬間、ユーリははっと気付いて慌てて寝台から立ち上がった。握っていた袋を寝台の横のサイドテーブルの上に急いで、でも丁寧に置く。

「も、申し訳ございません、王弟陛下」

言いながら、絨毯のひかれた床に膝をついた。この四年間、力や体だけでなく、礼儀正しさだって成長したつもりだ。それを今示さないでどうする。

ユーリが深々と叩頭しようとした時、それは近付いてきた彼の細い手にやんわりと押しとどめられた。顎の下を持ち上げられ、そのまま彼を床の上から見上げる格好となる。ユーリを見下ろす彼とばつちりと目が合った。

忘れていた、忘れようとしてきた気持ちだが、閉じられた箱の鍵を開けて心の中に溢れだす。

けれど青年はユーリが何か言う前に少し寂しげな表情で小さく笑

った。

「一八歳になったユーリは、異世界に僕の名前を置いてきたらしいね」

「え？」

きよとんとユーリが青年を見上げると、彼は腰を屈めてユーリの顔に自分の顔をぐいと近付けた。急に接近した彼の顔に、ユーリの心臓が慌てて胸を叩きだした。

「他の人間ならともかく、君にその呼び名で呼ばれると傷付く」

優しげな響きでささやかれた言葉に、体中の熱が顔へと集中する。彼の顔を見ていられなくて、ユーリは自身の顔を背けた。そしてその名を、忘れることなどできないその名を、噛みしめるように呟く。

「……リ、様……」

「聞こえない」

火照る顔を宥めながら、ユーリはそろそろと顔を上げた。再び、青年と目と目が合う。

なかばやけになり、今度は力を込めてはつきりとその名を呼んだ。

「アシエリ様っ」

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

名前を呼ぶだけでこれ程恥ずかしいとは、一体四年の間にどうしたというのだろう。本当に何かあちらの世界に置いてきたのかもしれない。

不意に青年、アシエリの手が伸びてユーリの銀の髪をすくい上げ

た。見つめるユーリの目の前で唇が落とされる。

「忘れられてなくて良かった。言うのが遅くなってごめん。……お
かえり、ユーリ」

『おかえり』

その言葉は、誰よりも彼の口から聞きたい言葉だった。自分の正しい居場所は彼の隣だと確信的に思い続けていたからこそ誰よりもほっとした。羞恥心なんて吹っ飛んだ。泣きたい気持ちと笑いたい気持ちがユーリの中でぶつかりあう。結果、泣き笑いな表情になった。

「ありがとうございます、アシェリ様」

言葉をこぼせば、アシェリの両腕がユーリの背中に回された。そのまま彼の胸に引き寄せられる。四年前と比べて、その胸は幾分硬かった。それでも、変わらない匂いに、ユーリを抱きしめる力に、どうしようもない安心感を感じて。

ああ、帰ってきたんだなあ、と。

そしてユーリはそのまま青年の胸に顔をうずめた。

不意に、アシェリの目が不思議そうに細められた。その視線を辿ったユーリは、先程自分が机の上に置いた袋を見つけた。

「あれは何だい？見たことが無い質のようだけど」

アシエリの質問に、ユーリは立ち上がって袋を手を取った。
この世界には皮や麻のような袋はあるが、ビニールやポリの袋は
もちろんない。アシエリが不思議に思うのも当たり前だ。

ユーリは手のひらに余るような、少しごついその袋を見下ろした。
胸の奥が痛む。

……きっと彼女は、引越す優梨の事を思って見た目よりも量を
優先してくれたんだろう。

本当は、優梨なんて人間いないのに。

「ユーリ？」

アシエリの声にはっとしたユーリは慌てて振り返った。口の端を
意識的に持ち上げる。

「これ、異世界で仲良くなった友達が饞別にくれた物なんです」

『友達』

自分で言っておいてまた胸が痛んだ。

ごまかすように、言葉が続ける。

「生姜っていう薬用の野菜から作ったお菓子なんですけど、これが
本当においしくって」

誕生日には秋の手作りお菓子がいいと何度も頼んだら作ってきて
くれた。一口食べてはまった。異世界にはこんなにおいしいお菓子
があるのかと。

生姜の香りと砂糖の甘さがいかにも秋らしくて、好きだった。

「どんな子なの？その友達は」

「え？」

アシエリを見れば、彼は自分のことのように嬉しそうにユーリを見ていた。

「ユーリが自分から友達って言う子は初めてじゃないかな。だからどんな子なのかなって」

青年の優しい声に、そう言えばこちらの世界では同年代の子達と遊んだことなどなかったと今更ながら思い出した。秋が初めてだったのだ。

無口でいつも冷静で、でも優しくって。

自然と、笑えた。

「すごく綺麗で、しかも頭は良いし運動もできるし、まさに容姿端麗頭脳明晰運動神経抜群と言う三段階がそろった子なんですけど、とにかく顔の筋肉が動かないんですよ。私はずっと一緒にいたから結構分かるようになったんですけどね？」

秋が笑った顔を思い出す。目が細くなって口元が綺麗に弧を描いて。

「あの顔を写真にしたら絶対高値で売れたと思うんだけど……」

「しゃん？」

「あ、えっと、あちらの世界では一瞬一瞬を一枚の絵みたいにして残すことができる機械があるんです。で、その絵を写真って言うんですが、友達の笑顔が本当にレアで、それを写真にしたら学校中の女の子達の奪い合いになっただろうなと」

惜しいことをした。まあでも、あの顔を自分の独り占めにできる

のは悪くないか。

無口でいつも冷静で。

そんな秋を友達と呼べるようになったのは、本当に奇跡だと思う。あちらの世界で、まがい物とは言え初めて年頃の女の子の生活と呼べる生活をした。こちらの世界の人間が一人もいないのいいことに。

秋を無理やり引つ張りだして遊びに行った。制服以外でスカート履かない秋に無理やりピンクのワンピースを着せた。テストが理解不能で秋に泣きついた。本当はどこでも良かったけど、もっと秋と一緒にいたかったからレベルの高い同じ高校を選んだ。

全く知らない異世界の人間を殺さなければいけなくても、秋と一緒にそんな毎日を通り過ぎていけばその罪悪感は忘れられた。

いつか別れなければいけないと知っていても秋と一緒にいたかったのはつまり、秋がいる毎日が好きだったから、秋が好きだったからだろう。

そうだ。秋は間違いなくユーリの友達だった。

頬を抑えた。その後、王にぶたれた箇所だ。治癒の術を施したがまだ熱があるように思える。けれどその熱はなぜかユーリをほっとさせた。

王に殴られるよりも、秋が死ななかつたことの方が大きいのだ。

頬の熱は、秋が助かった証のように思えてならない。

殺そうとしたのは自分だ。秋を、今まで何度もやってきた他の人間と同様に殺そうとした。その事実を曲げられない。でも。

『優梨に、ありがとうって言ってなかったと思って』

あの言葉を忘れられない自分もいる。ユーリが秋を友達だと一方的に思い込んでいるだけで、秋はこちらのことなど何とも思っていないかもしれないという疑い。それを一瞬で吹き飛ばすような言葉

だった。それを思い出したら、秋を殺すことがどうしようもなく辛い。

二分された心がどうしようもなく痛んだ。

神の子と崇められても所詮は人間だ。ガイスタ

後悔すると分かっているなぜ友達を殺さなければいけない？

ああでも、もしかしたら。

秋を殺そうとしたユーリを、秋はもう友達だと思っていないかも知れないのでは？

その時感じたのは、喪失感。

……せっかく、初めてできた友達だったのに。

自分で失ってしまった。一体どこまで馬鹿なんだろう？

気持ちと一緒に溢れた涙はとてつもなく熱かった。

11 (後書き)

序章がいやに長いといつこの計画性の無さ。でも一樣これで序章終了です。

体の下に感じるそれは慣れ親しんだものではなかった。シユウはこんな柔らかい布団で寝たことなどない。

やっぱり金をかければそれ相応の物は買えるんだな。こんなに気持ちが良いなら、ちょっと贅沢してこんなを買えば良かった。

そんなことをつらつらと考えながら、思わずため息を吐きそうになった。

昨日の時点で夢ではないと確信したが、それでもどこか現状を信じられない自分がいて。けれどこんな、手触りと寝心地だけでいかにも高そうな布団だと分かる寝台で寝てるというのはつまり。

自動的に昨日の出来事が脳内によりがえり、ああやっぱり夢ではなかったのかと、ゆっくりと目を開けた。

目に映るのは、見慣れない景色。近くにある窓から朝日が差し込んでいて綺麗だ。時間的にいつもの平日に起きる時間だろうか。

……それにしても。

兄と義姉に無断で外泊してしまった。妹のことになると理解不能な程心配性な二人のことだから、もしかしたら元の世界で警察沙汰にまでなっているかもしれない。客観的に見たら学校で行方不明になった訳だから、昨日クレイジユに宣告された通りずっと帰れないとすると、そのうち学校相手に訴訟まで起こしそうだ。勘弁して欲しいが、あの二人ならやりかねない。

さっそく痛もうとする頭を押さえて身を起こした。肩の上まで覆っていたシャツが滑り落ちる。

そういえばと、シユウは自身の髪の毛を触った。昨晚、夢の中で誰かに頭を撫でられたような気がする。優しい手つきで、軽く、ふわりと。

何でそんな夢をと思いつく理由を考えて、シユウは片手で顔を覆

った。

……どうやら自分はこんな世界に来て相当イタイ子になっているらしい。

人の優しさに飢えているだなんて。

自分らしくないと心の中で呻いた時、人の気配を感じてシュウは顔を上げた。

途端、シュウの目とぱつちりした大きな目が合う。丈の長いメイド服を着た若い女性が、両手に服のような物を抱えて立っていた。

誰か分からないが、とりあえず朝初めて会った人には挨拶だろうと、シュウは頭を下げた。

「おはようございます」

「あ……お、おはようございます！」

なぜか顔を赤くして視線をそらしたその女性は、わたわたと駆け寄ってきて、寝台の横の小さなテーブルに抱えていた物を置いた。

どこかで見たことのある顔立ちだなと、女性を見つめたシュウはすぐに思い出した。昨日の夜、何も分からないシュウに夕食や風呂を準備してくれた中年の女性、ミリアに似ている。と、部屋の入口の方からそのミリアの声が聞こえた。

「至らない娘で申し訳ありません、シュウ様」

つかつかと歩み寄ってきたミリアは上半身を起こした状態のシュウを見てにっこりと微笑んだ。

「お元気そうだなによります」

「あ、はい。おかげさまで」

ミリアはもう一度にっこりと笑うと、脇に立つ若い女性へと顔を

向けた。

「シユウ様、これは私の娘のイリアです。シユウ様のお世話は我々がいたしますので、何かあれば何でも遠慮なくおっしゃって下さい」

母親に背中を強く押されてシユウの前に押し出されたイリアは、赤い顔のままもごもごと呟いた。

「わ、私至らない部分もあると思いますが、誠心誠意努めさせていただきますので」

「よろしく、お願いします」

とりあえず頭を下げておく。本当なら、シユウは居候になる訳だからできることは自分でやりたいが、イリアを見ているとそれを言うのもはばかられた。母のミリアにきつい視線で睨まれているのだからいつそっ。

「シユウ様、よろしければ朝食にいたしますのでこちらにお着替え下さい」

ミリアの手の先に目をやれば、先程イリアがテーブルの上に置いた服が合った。手に取って見てみれば、膝より少し下くらいのズボンとシャツ、ベストにベルトという一式だ。サイズは合っていそうだが、どう見ても男用。

まさか二人にも性別を勘違いされているのかと不安になったシユウに気付いたのか、ミリアがすまなそうに眉尻を下げた。

「本当は女性の身に着けるドレスをご用意していたのですが、昨晚クレイジユ様に緊急事態だからこれをご用意するようと言われたのです」

一体昨晚何が起こったのだらう。気になったが、まあ正直似合わないドレスを着るよりは同じく似合わなくても動きやすいこれの方が良いと、シユウは頷いた。居候させてもらう上に服までかりるのは気が引けるが、仕方が無い。

「用意して下さって、ありがとうございます」

深く頭を下げると、良く似た母娘はそろって柔らかく笑った。

用意してもらった服はどれもぴったりだった。新品という訳ではなさそうだったが、丁寧に洗濯がされていてしわも無かった。靴は昨日フィリアスから渡されたブーツを履いた。これを履いて昨日走り回ったせい、足になじんで歩きやすい。

顔を洗い、服を全部身につけてから、料理を部屋の机の上に並べているミリアの近くへ行くと、振り返った彼女は少し目を見開いてから嬉しそうに笑った。

「良くお似合いですよ、シユウ様」

「あ、ありがとうございます」

男物が似合うと言うのもどうかと思うが、褒められて悪い気はしない。

少し照れくさくなって小さく礼を言ったシユウは、ミリアに促されるままにいすに座った。

異世界とはいえ、食べ物や元の世界とほとんど変わらなかった。

虫とか生肉とかが出されたらどうしようかと心配したが、それは昨晚の内に杞憂に終わっている。この世界にも当たり前のように人參

やジャガイモがあり、調理方法も大して変わらなかった。

机の上に並べられた、一人分にしては十分すぎる料理の皿を目の前に、シュウは再び兄と義姉を思い出した。

おかしな所で不器用な二人だから、今もまともな朝食を食べているか分からない。彼等に台所は任せられないと、元の世界ではシュウが毎日食事を作っていたが、帰れないとなると二人の食生活が心配だ。まあ、心配してもどうにもならないのだが。

忘れよう、とシュウは食事に取りかかった。見た目も味も申し分ない。誰かに作ってもらった物を食べるのは久しぶりだ。義姉が作ったものは食べ物ではなかったし。

「……おいしいです」

幾分類を緩ませて言えば、ミリアは自慢げに笑った。

「夫は王宮専属のコック長なのですよ。シュウ様の為にと、昨日も張り切っております」

「そうなんですか。とてもおいしいと、伝えて下さい」

そうは言ったものの、内心は複雑だった。

シュウは間違えようも無く一般人だ。確かにこちらの世界に来てから無駄に体が軽いし、何か色々しかしたような気もするが、それは所詮は不可抗力というやつで、決してシュウ自身が特別な力を持っているとかいう訳ではない。それなのになぜ、クレイジュやミアも含めて初対面の人間に敬称を付けて呼ばなければいけないのだろう。コック長だと言うミリアの夫にだって、張り切って料理を作ってもらう理由が無い。

その時、昨日フィリアスに『神の子』と呼ばれたのを思い出した。まさか皆、シュウの事を本当に『神の子』だと思っているのだろうか。だから敬称をつけて呼ばれるのか。

確かにシユウは生まれてすぐに両親に死なれたらしいが、その死んだ両親が神様だったなんて聞いたことはない。冗談にしてもありえない。

人違いか、なんてことを考えて、もしそうなら明らかに巻き込まれたな、と内心ため息を吐いた。人違いでこの場所を追い出されたら、どんな世界なのかも分からないこの場所でどうすればいいだろう。

釈然としない気分のままもそもそと料理を口に運んでいると、コップに紅茶を注ぎ足しながら急にミリアが口を開いた。

「クレイジユ様が、朝食がすんだら図書館へ来て下さいとおっしゃっております。イリアに案内させますので、そのつもりで準備をなさって下さい」

「図書館、ですか」

「ええ。分からないことが多いでしょうから、最初から全部説明する、と」

この状況を少しでも理解できるのなら、それにこしたことはない。人違いなら人違いでどうするか考えるにも、とりあえずは聞かなければ分からない。シユウはミリアに向かって頷いた。

「分かりました」

イリアの後について昨日の廊下に出ると、涼しい風が頬を撫でた。見れば、四角く切り取られた窓から青い空が覗いている。遠く小さく、立ち並ぶ建造物も見えた。昨日は暗くてすっかりとは見えなかったが、今はその、ヨーロッパ風の尖った屋根や煙突がはつきりと

目に映る。思わず息を飲んだ。いつかイギリスとかフランスに行きたいとは思っていたが、異世界でこんな風景が見えるとは。

「……シユウ様」

「はい」

窓の外から慌ててイリアへと顔を向けると、彼女はすまなそうな表情でシユウを見ていた。

「何ですか？」

「今朝のことなのですが……」

「はい？」

何かあっただろうかと考えてみるが、特に思いつかない。

「あの、申し訳ございませんでした。シユウ様があまりに知っている方に似ていらっしやっただので驚いてしまって……まともなご挨拶もできず……」

シユウは首を振った。そんなことで謝られる理由はない。

「むしろ謝るのは私の方です。料理とか服とか色々、その……すみません」

「いえそんな！私も母も父も、シユウ様のお世話ができることを誇りに思っていますから！」

力を込めてそう言ったイリアに、またどこかいたたまれない気持ちになった。そんな大層な人間でもないのに何でそうなるんだろう。クレイジユの説明とやらを聞けば少しは分かるだろうか。

暫くの間いくつもの廊下を歩いて階段を下り、たどり着いた所は

どうやら城の一階の様だった。木製の頑丈そうな扉が、廊下の突き当たりにはそびえるようにどっしりと構えている。よく見てみれば細かく植物の彫刻がほどこされていた。

「……ここはリギン様とセイジア様もお好きだった場所ですから、シユウ様もきつとお気に召すかと」

聞いた覚えのない名前にシユウは曖昧に頷いたが、イリアは特にシユウの答えを期待していた訳ではなさそうだった。懐古する様な口調は、リギンとセイジアという人物とイリアは何か関係があったことを想像させた。

「シユウ様、私はこれで失礼させて頂きます」

「あ、はい。ありがとうございます」

小さく頭を下げてから、いざ扉を押し開ける。重そうな外見に反して結構簡単に開いた。

扉の隙間に体を滑り込ませると、途端に古い紙の匂いが鼻をさす。シユウにとつては嗅ぎ慣れた匂いだった。どこの世界でも紙の匂いは変わらないらしい。固くなっていた心が緩んだようで、なぜかほっとした。扉を閉めて辺りを見回す。そこは、シユウがよく通った市の図書館とは比べ物にならないくらい大きかった。

四角い部屋の四つの壁を全て埋める見上げる程の高さの本棚に、隙間なく並べられたたくさんの書物。いくつもの巨大な本棚は入り組んでいて迷いそうだ。まだ時間的に早いせいか人はいない。クレイジュもまだ来ていないようだった。

その、ひっそりとした空間に胸が高鳴った。足を踏み出すと、カツンという涼しい音が響き渡る。静かな空間を乱してしまったようで少し罪悪感を覚えた。その時だった。

「……これはこれは」

誰もいないと思っていたのに、聞こえてきたのは低くしわがれた老人の声だった。そちらを見やると、本棚と本棚の間、小さな空間にカウンターがあるのに気付いた。そのカウンターの向こうから、いすに座った小さな老人がシュウを見ている。皺の刻まれたその顔は、笑っているせいでますますその皺が深くなっていた。

「驚きましたな。一瞬リギン様が若返って帰ってきなさったのかと思いましたが。名は……シュウ様、と言いましたかな？」

「あ、はい。シュウ・カンザキと言います」

「シュウ・カンザキ……異世界の言葉は発音が難しい」

苦笑いを浮かべてそう言ってから、老人はそそり立つような本棚へと視線を移した。

「お二方もここが好きですね。毎日のように連れ立っていらつしやったものですよ。夜中にこっそりやってきて夜通し魔道書を読みふけていた時もわたしは見てもわたくしは見てもわたくしは見て見ぬふりをしたものでしたが」

どうやら老人の言う二人というのはさつきイリアの言っていたリギンとセイジアという人らしい。有名な人物なのだろうか。

「あの方達の魔力はそれはそれは素晴らしいものでした。けれど個人が持つ能力というのはその者の運命を選択してしまうのかもしれない。だからあのようなおね……」

「ケルン殿」

テンポの速い靴音を響かせながら近付いてきたのは、昨日と同様柔らかな笑みを浮かべたクレイジユだった。ケルンと呼ばれた老人も

彼を認めて微かに笑う。

「これはクレイジユ様、お久し振りでございますな。今朝はいかような御理由で？」

「シユウ殿に全てをお話しする為ですよ」

「なんと。まだ御説明しておりますんだか。いや申し訳ない。シユウ様があまりにリギン様にそっくりだったので、ついつい何も考えずに思い出話をしておりました所です」

ケルンとクレイジユは何か通じ合ったかのように同時に笑みを深めた。

「お気持ちはよく分かりますよケルン殿。わたしも驚きましたから」

ふふつと声に出して笑ってから、クレイジユはそれでは、とケルンに頭を下げた。

「奥の書庫、使わせて頂きますので」
「承知致しました」

こちらですと歩き始めたクレイジユの後ろを、シユウはケルンに頭を下げてからついて行った。

驚いたことに、図書館と呼ばれる建物は一つではなかった。ケルンのいた王城と繋がっている建物にさらに二つの建物を加え、総じて図書館というのだそうだ。それぞれが通路で繋がっていて、シユウはその内の最奥の建物へとクレイジユに連れて行かれた。その建

物のさらに奥には書庫があり、そこには小さな机といたすが置かれていた。周囲には棚からはみ出した書物が積み上げられている。見るからに古びた本達だった。

「ここにあるのは大体がこの国の建国史や世界の歴史が記された本です。あまりに古いので今では学者達しか見る者はいませんが」

クレイジユはそう言って、棚から迷うことなく数冊の分厚い書物を引っ張り出して丁寧に机の上に置いた。

「どうぞ」

すすめられるまま、シユウは一番上の本を引き寄せて開いた。思わず手が止まった。ページに綴られていたのは見たことのない文字だったのだ。英語の筆記体をさらに解かしたような文字。日本の草書を横書きに変換したようなものにも似ている。けれどなぜか、文を目で追っていくと自動的に頭の中に単語が浮かび、文節ができ、文が組み立てられて読んでいくことができた。前文のようなものが書かれている。

「やはり、読めますか」

「はい」

クレイジユの問いに頷くと、彼もそうですかと小さく頷いた。

「これは何千年も昔に記された本です。当時に不劣化の魔法が掛けられたみたいでこんな状態で残っているのですが」

細い指でクレイジユは開かれたページに書かれている文字をなぞった。

「この文字は神の文字と呼ばれる文字で、神界の神々が使っていたものがこちらの世界にどのような形でかもたらされたと言われています。大昔、この世界の人々はこれで読み書きしていたのですが、時代の流れと共に廃れて今では読める人はほとんどいません。けれど元々は神々が使っていた文字。ですから、シユウ殿が読めるということはつまり、あなたが神の子で間違いないということなんです」
最初から疑ってはいませんでした。とクレイジユは続けた。

「まあそうは言ってもシユウ殿にはこの世界の成り立ちから説明した方が良いでしょうね」

彼は違う本を手に取り、地図が描かれたページを開いて話し始めた。

第一章 01

島国と大陸国（後書き）

次回、昔話です。

この世界に存在する全ての国には神界に住んでいると言われている神の名が付けられており、光と影に分類される。シユウのいる島国フィアナとユーリのいる大陸国シャルキの間には境界線があり、フィアナ以東に位置する国は影、シャルキ以西は光に属している。

神界にはそれぞれ『光の世界を統べる者』と『影の世界を統べる者』として、言うなれば王のような神がいた。彼らにちなんでこの世界には『光の大国』と『影の大国』と呼ばれる、比較的他の国々よりも面積が大きな国がある。光の大国はシャルキ、影の大国はフィアナより西へ少し海を渡った位置にあるリシユールと呼ばれる国がそれになった。長い間それぞれ大国は均衡を保ち、海を渡って貿易を行いながら栄えていた。ちょうどシャルキとリシユールの間にあるフィアナは、両国の貿易の中継地点として欠けることはできない重要な国だった。

けれど今より二十年程前、現在のシャルキの王ヴェルディアの父ソリユードが、影の国々を光の支配下に置こうと考えたのが始まりだった。

『影は光の下で存在するべき』

そんな信念のもと、ソリユードは手始めに、独立していた周辺の小国を全て自国の属国とし、そして次にその国々を合わせた戦力を掻き集めて連合軍と称し、その全てをフィアナへと送った。

影の国を支配下に置くには、大国リシユールを攻めなければならぬ。けれど、シャルキとリシユールの間は海を隔ててかなりの距離がある。そこで間に位置するフィアナが標的となったのだ。間とは言え、その場所は比較的リシユールに近い。フィアナを落とせばリシユールを落とすのはかなり楽になる。

大国シャルキの十分の一にもみたくないフィアナが自国だけで連合軍を相手とするのは無理だった。けれど援軍を頼もうにも、ちょうど同時期にリシュールでは妖魔が大量に出没し、他国に軍を出せる状況ではなかった。しかし勝たなければ光と影の均衡は崩れる。両国で幾度も話し合われた結果、数百年前にとある国が取ったと言う案が採用された。その案を実質的に行ったのが、リギンと言う男性とセイジアと言う女性だった。

「リギン様も、わたしと同じ平民出身の方でした。けれどわたしがこの城に来た時には彼はすでに軍の最高職である一当家総長の位置におられました。二十代そこそこという年齢から見れば、驚異の出世です」

クレイジユはそう言うと、懐かしそうにわずかに目を細めた。

「セイジア様もそうです。セイジア様は一当家副総長。……歳も近く、誰よりも長く一緒にいられたお二方ですから、ご結婚なされるのも当たり前でした。誰もが心から祝福しましたよ」

けれど蜜月は長くは続かなかった。以前から怪しかったシャルキの動向がはつきりしたのは、リギンとセイジアの結婚直後だった。シャルキが周辺諸国を攻め始めたと聞いたリギンは、すぐにどこかへ姿を消したと言う。

「おそらくセイジア様は知っておられたのだと思いますが、あの方

はリギン様がどこへ行つたのか一言もおっしゃりませんでした」

ただ、数日後に戻ってきたリギンを見て、全ての人間が、彼が何をしたのか悟った。

「リギン様は、神を、喰つたんです」

「……喰つた？」

シユウはその生々しい響きに眉をひそめた。

「喰つた、というのは少し違いますかね。実際は、神に体を貸した、もしくは神を取り込んだ、と言うのが正しいかもしれませぬ」

どこの国にも守護神と呼ばれる神がいる。それが影に属する国ならば、その守護神は神界の『影の世界を統べる者』であるリシユール神の分身にあたる。分身とはいえ、神界のトップに立つ神の一部分だから、魔力神力共に凄まじかった。

「普通ならば、そのような強大な力を体に取り込むことのできる人間はいません。けれどリギン様は、……セイジア様もそうでしたが、……稀に見る力の持ち主でした。力が蓄えられる魂の器が大きく、だからリギン様は守護神を取り込むことができたんでしょね」

クレイジユは一つ息をつく、ふとシユウの髪に目をやった。

「……もともとリギン様の髪は黒に近い灰色でしたが、戻ってこられた時には黒一色にそまっています」

「黒に……？」

「ええ。最初から、髪の色はその人の持つ魔力や神力の大きさを表しているんです。シャルキ神の力を強く受けていればいる程白い、リシユール神の力を受けていればいる程黒い髪に。ですから、リギン様が戻ってきた時にすぐに分かったんです。彼が何をしたのか」

少し悲しげに視線を落としたクレイジユは、すぐに口元に笑みを浮かべた。

「リギン様はおっしゃいました、『リシユール神も自分のすることをお認めになつた』とね。……本来ならば一人の人間が神に等しい力を持つことなどあつてはならないことなのでしょうが、この世界だけでなく、神界にとつてもそれだけ緊急事態だったのかもしれない。この世界の光と影の均衡が崩れれば、神界にも少なからず影響が及ぶでしょうから。だからこそ、リシユール神もリギン様をお認めになったのだと思います。いや、あの方の判断に委ねられたとしても言うべきか。確かに、リギン様の決断でフィアナの流血は最小限に抑えられましたし、結果的に光と影の均衡も保たれている……」

自分自身に語っているかのような口調にクレイジユ自身が気付いたのか、彼は突如話すのを止めた。

「すみません、シユウ殿。ここからは少し、わたし自身もどう話せばいいのか分からないのでややこしくなってしまうかもしれません。……お聞き願えますか？」

「あ、はい。お願いします」

シユウがしっかりと頷くと、クレイジユも頷き返した。

リギンが神をその身内に取りこんでからしばらくの間、フィアナでは何事も無く平和に時が流れた。シャルキは周辺諸国を従えるのに忙しく、まだその目はフィアナには向いていなかったのだ。その静かな時間の内、セイジアは一人の子を産んだ。リギンが神と同化してからできた子のように、その子の髪は黒一色だった。

そしてその子が産まれて半年が過ぎた頃、いよいよシャルキの王ソリユードの矛先がフィアナに向いた。光の大国リシュールで妖魔が出没し、フィアナに軍が送れないと聞いたリギンは、すぐに自国の王フィリアスに自身の計画を告げた。これが、最も犠牲が少なく確実に国を守ることができる方法だと。

「リギン様もセイジア様も、全てを読んでおられました。いくら神の力を持つ人間がいても、数十万の軍勢に勝てるはずが無い。けれど時間が経てば、必ず抑えつけられた寄せ集めの連合軍は分裂する。フィアナが影の国として存在し続けるのに必要なのは、連合軍を上回る軍勢ではない。……時間だ、と」

数年の時間さえあれば、連合軍は勝手に消滅する。それならばどうやってその時間を稼げばいいか。

「そこでセイジア様が思い出されたのが、数百年前の術だったんです」

シャルキがリシュールを攻める為にフィアナを足掛かりにするなら、そのフィアナに入ることができなくすればいい。

「フィアナという島国全土に絶対的な不侵入の術を掛けるとするのは、規模の大きな術でした。規模の大きな術にはそれだけの代償が必要になる。フィアナを術で囲み、その中で国民が普通に暮らすと

いう訳にはいかなかったんです。代償が、時、でしたから」

クレイジユは小さく笑った。

「今考えればおかしな話です。時間を手に入れる為に掛けた術が、わたし達から時間を奪っていたなどと」

「それじゃあ……？」

「ええ、16年です。16年の間、この国の時は止まっていた。その間に、シャルキではソリユード王が死に、今ではその息子のヴェルディアが王となっている。……シユウ殿、昨日、王とシャルキの城を脱出した時、何かおかしな所を感じられませんでしたか？違和感、みたいなものを？」

少し考えたシユウは、すぐに口を開いた。

「城を守る兵士の数が少ない、しかもあの人達、あまり戦闘に慣れてなさそうだったって所ですか。たかだか侵入者の二人を、結果的に捕まえられなかった訳ですし」

シユウの答えに、クレイジユは満足そうに笑った。

「その通りです。先程言った通り、リギン様とセイジア様の読みは当たっていたんですよ。シャルキでは今、従えたはずの諸国があちこちで乱を起こしています。ヴェルディア王はその鎮圧で必死。……それこそ、自身を守る城が手薄になる程に」

そう言って、クレイジユは静かに、長く息を吐いた。

「リギン様は、シャルキの城の祭壇の間と呼ばれる部屋に入ったフイリアス王に術を掛けてから、フィアナ全土にも同じ術を掛けまし

た。そして最後にもう一つ術を掛けたんです」

大規模な術を完成させるには『鍵』が必要になる。ソリユードの手にその『鍵』が渡ってしまえば全ては終わる。

「異世界には黒い髪を持つ人種がいると知ったりリギン様は、一歳にも満たない自分の子の神力を強く封じ、異世界へと送りました。そうすれば、もしシャルキの人間が異世界へ『鍵』を探しに来て、黒髪にまぎれてはれることは無いと考えたんです。つまり、リギン様とセイジア様の子供が、『鍵』だった」

そして最後に残った問題は、いつ、どうやって術を解除するか、だった。

『鍵』である娘は異世界にいる。どうすればこちらの世界に適当な時期に戻ってこられるか。

「早すぎたはいけないし、あまり遅すぎてもどう状況が変わるか分からない。お二人にとっても、これは大きな賭けだったと思います」

信じられない話ではあったが、自分の身に起きた出来事を考えれば信じない訳にもいかなかった。

シユウは疑わなかった。足もとで光り始めたあの青い光が浮かぶ。

「ユーリに、呼応させたんですね」

シユウの淡々とした口調にクレイジユは一瞬苦しそうに眉を寄せたが、すぐに小さく頷いた。

「ええ、そうです。ソリユードは、必ず『鍵』を探す為に神力のある数少ない神官を異世界に送るだろうと、リギン様は考えたんです。

けれど異世界とこちらの世界をそう簡単に何度も往復することはできない。『鍵』である娘もそう簡単に見つかりはしないだろう。それでは、その神官が『鍵』を見つけれずはこちらの世界に戻らなければいけないのはどういう時か。それはつまり、シャルキに神官の強力な力がどうしても必要になった時、すなわちシャルキで戦闘が起こった時、です」

「ユーリがこの世界に戻る時が、その『鍵』の戻る時だった」

「はい。その時に、その子の封じられた神力も戻るようになっていました。そして、強制的に送還される場所を王のいる祭壇の間にしたんです。その子がフィリアス王と接触し、王が目覚めた時初めて、フィアナに掛けられた術が解除されるようになっていました。つまり二重の鍵ですね。……シユウ殿、一番初めに王と何らかの形で接触したりしませんでしたか？」

すぐに思い出して、シユウは頷いた。

「剣と、膝がぶつかりました」

「それですね。その時に、このフィアナも時を取り戻したんです。まあつまり……」

そこで言葉を区切って、クレイジユは一拍おいた。

「昨日、なんですが」

02 (後書き)

前話で、ミリアの娘の名前が前半はイリア、後半でなぜかシリアになっておりました。

正しくはイリアです。変な間違いしちゃってすみませんでした。

教えて下さった方、本つつ当にありがとうございます。

色々な所で色々と間違わずには生きられない人間なので、これからもたくさん間違えると思いますが、発見した時は笑ってやって下さい。そして教えて頂けると有り難いです。

秋は元々施設にいたらしい。

本当の親はどうなったのか、どうして施設にいたのかは今まで大して疑問にも思わなかったし、本当の家族と言って差し支えない人達が、すでに物心つく前からいたので聞こうとも思わなかった。

現在『親』となっている神崎老夫妻に引き取られたのが2歳になる前だったらしいので、まあそれも無理は無い。そしてその時秋と一緒に引き取られたのが9歳上の『兄』、冬哉だった。血の繋がりは無い。神崎夫妻は初め、秋一人を引き取るつもりだったらしいが、まだ赤ん坊だった秋を冬哉はいたく気に入り、どうしても離れたがらなかった為、それならと夫妻は二人一緒に引き取って育ててくれた。曰く、『秋と冬は切っても切れない仲でしょう？』ということだそうだ。

夫妻は秋と冬哉を引き取った時にはすでに還暦を過ぎていた為、ちょうど二年前に、秋と冬哉にとつての育ての父が、そしてその後を追うように育ての母が亡くなった。その頃には冬哉は成人していて手に職もあつたし、慎ましくも夫妻は秋と冬哉に遺産を残していったので暮らしに困ることも無かつたのだ。

確かに周りの同年代の子供達と比べたら養父母は年を取っていたけれど彼等を父と母と呼ぶのに何の抵抗も無かつたし、むしろ秋にとっては二人の全てが誇りだった。

だから全く、産みの親について自分から考えることも無かつたのだ。

だけでも、実の両親が異世界人だったとなると話は違う。
というか、シュウがその娘だと言うのなら、シュウ自身も異世界人になる訳で。

……いやいやいや、反応に困る。

普通に十七年間暮らしてきたが、まさかそんな『鍵』だとかいう役割を課されていたなんて全く知らなかった。知る筈も無いのだが、それでも急にそんな話を聞いたって人ごとにしか思えない。

顔を上げれば、ちょうどこちらを見ていたクレイジユと目が合った。優しい視線がシュウを見つめる。

「……驚かれましたか？」

「え……ああ、はい」

実際は何だか自分のこととして考えられないだけなのだが、この事実は十分驚くのに値することだ。シュウは曖昧に頷いた。

「リギン様とセイジア様は、その時が来るまではシュウ殿に、自分が実の親に結果的には利用されたなんて知りながら育ってほしくはないとおっしゃっていました。時が来てしまえば嫌でも知ることになるから、その時までとは」

「そうですね」

シュウは言葉を切り、気になっていたことをおずおずと口にした。

「それでその……二人は、どうなったんです？」

クレイジユは悲しそうに瞳を伏せた。長い睫が影を落とす。

「まだリギン様の術が完成していないうちに、予想外の速さで連合軍の第一部隊が到着しました。それにセイジア様はお一人で立ち向かわれたんです。『犠牲は二人で良い』とそうおっしゃられました。『リギンとわたしだけで良い』と。リギン様の術が完成するまで三日。その最後の日に、セイジア様は第一部隊を自身の持つ全ての魔力で迎え撃った」

「軍勢を、一人で？」

「そうです。本当に、セイジア様は素晴らしい力の持ち主でしたから不可能ではありませんでした。けれどいくら力が大きいとは言え、それに限界はあります。セイジア様は力の蓄えられた魂の器が破壊するまで、自身の体が崩壊するまで魔力を使った」

「それで、亡くなった……？」

シウウにはその時クレイジユがうなだれたように見えた。本当に、その人の死を悼んでいるような。

「はい。魂の破壊は肉体の破壊です。ですから、体の一部も残らなかったと……」

「体が、消滅した」

どこか、引つかかるものを感じた。

シウウが自身の産みの親について自分から考えたことは無い。けれど一度だけ、兄である冬哉からそれらしき話を聞いたことがあった。

小学校高学年の頃だったと思う。食事時に兄は、突如として真剣な顔で言っただけだ。と話し始めたのだ。

冬哉が小学生だった頃、学校からの帰宅途中でおかしな男に会ったと言う。黒髪で、どこか昔のヨーロッパを思わせる服装の男だったそう。男は腕に赤ん坊を抱いていた。

「今思えば、秋にすごく似てたよ、あの人」

冬哉は難しい顔でそう言った。

「口からたくさん血が出てたしフラフラしてたから、俺びっくりして救急車呼びますって言ったんだけど……」

そしたら怪我人とは思えない程の力で走りだそうとする腕を掴まれ、眠る赤ん坊を強く押しつけられたそう。

「『時間が来るまで幸せに。……頼む』って俺にそう言った。そのままその人倒れて……それで……」

理解できない、というように冬哉自身が眉をひそめたのを覚えてい

る。

「消えた」

きよとんとする小学生の秋に、兄はもう一度繰り返した。

「消えたんだ。俺も信じられないけど、確かに消えた。地面に吐血した痕が残ってたから、体だけが消えたんだよ」

つまりそういうことではないだろうか。

血の繋がりがあられるらしいとは言え、記憶に無い親をどう呼んだら

いいのが分からず、シュウはためらいがちに言葉を発した。

「その、リギンという人、は私がいた世界で亡くなったんじゃないですか……？ 兄から、私に似た男性が目の前で消えたという話を聞いたことがあるんですが」

クレイジユは小さく頷いた。

「リギン様が異世界へ渡られた時にはファイアナの時は止まっていたから、実際にリギン様がどうなったかは私には分かりませんが、けれど、全ての術を掛けて、その上異世界へ渡れば間違いなく力は尽きるだろうと、リギン様はおっしゃっていましたから……」

「セイジアさん、と同じように、魂が破壊されたってことですね」

「はい」

沈黙が落ちた。

シュウはリギンとセイジアという実の両親を思った。

ファイアナというこの国の為に、全てをかけた二人。その『全て』には、シュウ自身も入っている。

確かにシュウは、クレイジユが言った通り実の両親に利用された訳であって。

……どう、受け止めればいいんだろう？

「シュウ殿」

考え込んだシュウに、不意にクレイジユが沈黙を破って呼びかけた。

「はい」

顔を上げると、クレイジユは少し気まずそうにシユウを見ていた。

「その……確かにシユウ殿は『鍵』として利用されたとお思いいなるでしょうし、産まれてたった半年しか一緒にいられなかった訳ですから、確かにリギン様とセイジア様を親とは認められないかもしれませんが、その……」

言いにくそうにクレイジユは言葉を切ったが、すぐに幾分はつきりした口調で続けた。

「シユウ殿、お二人をどうか嫌わないで下さい。たった半年の間でしたが、リギン様もセイジア様もシユウ殿を大変可愛がっておられましたから。……フィリアス王に嘘を付くぐらいに」

「え」

……嘘？

クレイジユの最後の一言に問うような視線を投げると、彼はあからさまに視線をそらせた。

「何の、話ですか」

聞くと、クレイジユは心底困ったようだった。

「知っておいた方が良いとは思いますが、何と言つか……そのですね」

シユウがじいっとクレイジユを見つめると、その視線に気圧されたのか彼はふう、と小さく息をついた。

「……非常に言いにくいんですが」

「はい」

「フィリアス王は、シユウ殿にとても似ている、ある方が好きだったんですよ」

「はあ」

何の話だろうと、シユウは内心で首を傾げた。

「でもその方は、王のお相手にはなられませんでした。はつきり言うてしまえば、王など眼中に無かったんですね。……それで、シユウ殿は成長なさったらきつとその方に似るだろうから、年頃になって異世界から戻ってきた時に王の獲物にならないようにと、お二人は心配したんです」

「はあ」

「だから、リギン様とセイジア様はフィリアス王に、自分達に産まれたのは息子だ、と」

「……え」

絶句した。

ただ単に、男に見えるから男だと思われているのかと考えていたが。

「……性別、ごまかしたんですか」

「そういうことになりますね」

そういう方達でしたから、と、半ば強引にクレイジユは付け加えた。爽やかな笑顔と一緒にだ。

シユウは自分自身を見下ろした。

ズボン、シャツ、ベスト、ベルト。……男用。

『昨晚クレイジユ様に緊急事態だからこれをご用意するようにと
言われたのです』

ミリアの声が頭の中で響いた。

ということは、フィリアスはその、シュウに似ているという人のことが今現在も好きなのだろうか。

まあどちらにしろ、知らない人に重ねて見られるのは嬉しいことではない。

「……分かりました」

それ以外に返す言葉は無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970k/>

天心天命

2011年11月13日21時59分発行